魔王様は愛を知りたい

黒葉　傘

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

創られた魔王は、愛を知らぬまま勇者によって討たれた。

愛を知りたいと願った魔王は、気づくと人間の女の子へと生まれ変わっていた――。

倫理感と常識がいろいろバグっている女の子が周りの人々に絆され、愛を知っていく物語になる予定。

＊不定期更新です。

＊この小説は小説家になろうでも投稿しています

目次

ある魔王の死 ―― 1
赤目の少女 ―― 9
狼と返り血 ―― 15
特別なアクセサリー ―― 26
貫く剣 ―― 38
聖女と悪魔の子 ―― 45
聖女ヨル ―― 54
聖女になるという意味 ―― 62
魔王様のお見合い ―― 74
正義の執行者 ―― 88
不信感 ―― 100
人間か、魔族か ―― 110
入学式 ―― 117
3人の聖女 ―― 126
魔法と術式 ―― 136

ある魔王の死

それはまさしく地獄のような光景だった。
あたりにはおびただしい数の死体が転がり、肉の焦げる異臭が鼻につく。
建物は倒壊しあちこちから火の手が上がっている。
死に損なったものが痛みに呻き、絶望の悲鳴をあげている。
そんな最悪の状況で私は目を覚ました。
「ああ、無事起動しましたね」
顔をあげると女が安堵したようにこちらを見ていた。
こいつはたしか…技術者だったか。
前に、私の体を調整している時に見た。
だがなぜここにいる、ここはどう見ても戦場だ。
戦闘能力のない人間のいるべき場所ではない。
そもそもなぜこんな状況になるまで私は目を覚まさなかった？
私はなぜ眠っていた？
この都市の防衛術式はどうした？

勇者との戦闘に備え、我々は数々の対策を取っていた。
それが何故こうも容易く攻め込まれている？
疑問が溢れては消えた。
私は魔王型生物兵器仮称【アデル】。
早々に勇者に討たれた前代魔王を素材に魔界を立て直すために創造された人工の王。
その私が、襲撃に対して眠っていた？
理解不能な事態の連続に混乱する私に対し、女はさらに言葉を続けた。
「貴方の肉体は現在休眠状態です。戦闘可能な状態ではありません」
「……どういうことだ？」
その休眠状態になっていた理由がわからないから混乱しているのだ。
「もう、立て直すことは難しい状況です！降伏しましょう魔王様!!」
そう叫ぶ技術者の言葉を聞いて私はおおよその事態を把握した。
謀ったな……!?この女。
私の身体に手を加えられる者はそれほど多くない。
この女は数少ないそんな人物の一人だ。
降伏するしかないこの状況はこの女が望んだものだろう。
「いたぞ魔王だ！」

思考していると、駆けくる侵略者共が目に入った。
「邪魔だ!!」
邪魔な技術者を蹴飛ばし、攻撃術式を起動する。
「……っ」
だが発動しない。
休眠状態というのは嘘ではないらしい。
飛びかかって来た侵略者を尻尾で迎撃する。
いつもより動きが鈍い、まるで自分の体ではないようだ。
「があああぁ!!」
雄叫びを上げつつ腕を振い、付近の侵略者を蹴散らす。
私の気迫に怖気ついたのか侵略者共が一歩下がるのを感じる。
いける。
術などなくとも奴らを肉塊にしてやる。
そう思った瞬間、
私の半身が消し飛んだ。
「下がれ、魔王の相手は僕がする」
そこに立っていたのは勇者だった。

黄金の髪に整った容姿。
その青い瞳には憎らしいほどの強い正義が浮かんでいた。
それからはもう一方的な戦いだった。
必死に応戦するも、奴の剣により四本あった腕も足すらも全て切り裂かれた。
私はなす術もなく地面に横たわる。
完膚なきまでの敗北だ。
だが、トドメの一撃が来ない。
顔を上げるとあの技術者の女が私を守るように勇者との間に立っていた。
「どいてくれ、君は自分が誰を庇っているのかわかっているのか？」
人間が相手だからか、勇者の声色は優しかった。
私には向けられたことのないような声色。
どうやら勇者は自分と同じ人間のため、女を切るのを躊躇っているようだ。
これが魔族なら、私諸共切り捨てていただろう。
「お、お、お待ちください。もう負けです。負けました！降服しますから、ど、ど、どうかこの方の命だけは……」
女が泣きながら勇者へ訴える。
私の生存の保証、女の目的はそれか。

だがわからない、私が生きることでこの技術者の女になんの得があると言うのだ？

「こ、この方の中にはまだ私の娘が……私の娘はまだこの方の中で生きているのよぉ!!」

「!!」

勇者が目に見えて狼狽するのが分かる。

一体何だというのだ。

私は全ての優れた生物を掛け合わせて製造された、その中に人間が入っているのは当然のことだろう。

女が放った言葉のどこが勇者を動揺させたのか理解出来なかった。

だが、あの勇者が一瞬弱気な表情を見せた。

隙だらけだった。

「死ねッッ！」

鋼鉄の尾を振るい女諸共勇者を貫く。

これで終わりだ、そう思った。

だが、逆転の一撃は光の壁に阻まれた。

勇者は1人ではない。

聖女の守りによって私の攻撃は防がれたのだ。

「魔王！キサマァァッッ！」
勇者が激昂し剣を振るう。
そこに先程の迷いは無かった。
そして私は頭から両断された。
死だ。
私は自分の肉体が終わったのを感じた。
死にゆく中私は最後に勇者の言葉を聞いた。
「愛を知らぬ憐れな生き物め、これで終わりだ……」
……何なんだ。
愛とやらはそんなに大事なのか？
愛とやらはそんなに偉いのか？
人間はすぐそれを口にする。
その言葉の意味を私は理解出来ない。
私の頭には魔王になるための膨大な知識が詰まっている。
しかし人間の感情、特に愛とかいうものは理解不能なものだった、私の中にそんな知識はない。
誰もそんな事教えてくれなかった。

そんなに大事なら私に教えてくれよ!!

いいだろう

どこからか声がした。

◊◊◊◊

とある村に赤子が生まれた。
産んだのは最近村に越してきたばかりの女性だった。
夫の姿もなく、ただ1人で寂れた村にやってきた妊婦は目を引いた。
彼女の裕福な身なりから貴族だということは明らかだった。
だが、どんな事情があるにしろ村人たちは彼女を暖かく迎え入れた。
その村の村人たちは奇跡のように気のいい優しい人たちばかりだった。
優しい人たちの助けもあり、彼女の出産は無事成功したかに見えた。
だが、生まれてきた赤子は産声を上げなかった。
死産かと慌てふためく産婆、だが母親が抱くとその女の子はパチリと目を開けた。

「ヨル、あなたはヨルよ」
そう言われても赤子は無反応だった。
「愛しているわ、ヨル」
だがそう言われると赤子は嬉しいのか、目を細めた。
母親の青眼とは似ても似つかぬ血のように赤い目だった。

赤目の少女

どうやら私は生まれ変わったらしい。
勇者に殺されたと思ったのだが、気づいたら人間の赤子になっていた。
生まれた瞬間はよく状況が分からず、目の前の人間を殺そうとしたが、その人間が「愛してる」などと言うものだから、思いとどまった。
どうやらその人間は今世の母親だったようだ。
そして私はもう魔王ですらなく、非力な人間になったと学習した。
前世で私が死ぬ瞬間、愛について教えて欲しいと思ったら返事が返ってきたのは覚えている。
これが答えなのだろうか？
人間になれば愛を学べると？
「おい母親、私を愛しているか？」
今世の母親に聞いてみる。
「あらあら、どうしたのヨルちゃん。もちろん愛してるわよ～」
「……」

愛しているらしい。
これが答えなのだとすれば、おそらく私に愛を教えてくれるのはこの人間なのだろう。
どれ、愛とやらの素晴らしさを教えてもらうとしようか。
もしつまらないものなら、また魔王に戻って人間を滅ぼす、それで良いだろう。

◊◊◊◊

私が生まれてから5年の月日がたった。
人間の生活にもだんだん慣れてきた。
私の名前はヨル・ヴァ・リデルというそうだ。
『ヴァ』というのはどうやら貴族の姓らしく、人前で名乗るなと母親には言い含められている。
私を生んだ母親はアイシャという名だ。
父親は……いない。
母親に聞いても詳しくは答えてくれない。
まあ、いないならいないでいい。

親というのは子供を愛すると聞いたから、父親の愛とやらも学びたかったのだがな。
そう、肝心の愛について学べたかというと……正直わからん。
母親や村の人間に愛とは何か聞いても。
「あら～、ヨルちゃんはおませさんね～そういうのはもっと大人になってからね～」
とか
「おう！ヨル！お前はまだちっちゃいからなぁ、もう少し大きくなってからな！」
などと要領の得ないことしか言わない。
なんなのだ！
大人ってなんだ!?
具体的に何歳だよ！
しかも人間どもが微笑ましいものを見るような目で見てくるのが気に入らん。
まあいい、とにかく私は人間の常識を知らなすぎる。
そうゆうわけで、私は毎日人間の子供と混じって遊んでいる。
人間の子供がどういう生き物なのか、どう振る舞えばいいのか学習しているのだ。
ちなみに私の容姿は5歳の女児だ。
黒い髪を腰まで伸ばし、瞳の色は赤、肌は白く、色素の薄い印象を受ける。
人間の子供と混ざってもそんなにおかしくない容姿なはずだ。

しかし、なぜかよく話しかけられる。
特にこの村の子供たちは私のことを好いているようで、よく私を取り合ってグループ間で喧嘩をしている。
わけがわからない。
理由を聞くと私は『かわいい』らしい。
勘弁してくれ、私には人間の容姿の美醜なぞわからんのだ。
ただでさえ母親以外の人間の区別をつけるのに苦労しているのに……
今日も私より大きな人間の子供に引きずられた。
人間の子供は乱暴だし、とにかく騒々しい。
発情期のゴブリンだってもう少しは大人しいぞ。
そんなこんなで家に帰る頃には私は疲れ果てて、服はボロボロの泥だらけになっている。
服を汚したことを母親に叱られるのもいつものことだ。
解せぬ。
汚したのは私ではない。
人間になってからは気に入らない事ばかりだ。
だが1日の終わりに母親に抱かれて眠る、その時間だけは悪くなかった。

母親は私の頭を撫でながら、私が寝付くまで子守唄を歌ってくれる。
母親の澄んだ美しい歌声も、頭を撫でる手の暖かさも、私は好きだった。
私の中で経験したことのない奇妙な感覚が溢れる。
これがなんなのかわからないが、安心した。
ここにいてもいいと、言われている気がした。

◇◇◇◇

私の娘ヨルは、とっても可愛い。
クリクリしたお目々も、あの人譲りの黒髪も、白い肌も全部大好き。
言動がちょっと変だし、奇行も目立つけど、それも可愛いところ。
まぁ、言葉使いは直して欲しいけど……
私はあの子の前で一度も乱暴な言葉を使ったことないのに、まったくどこで覚えてくるのかしら？
この前なんて
「母親、お前には感謝している。私なりに何かお返しをしたい」
なんて嬉しいことを言ってくれたと思ったら、つづく言葉が

「誰か気に入らない人間はいるか？私が消してやる」
だもん。
私はあの子が優しいのか、残酷なのかわからないよ……
私に懐いてくれているのは確かなんだけど。
幸いなことに聞き分けの良い子だからやっちゃダメなことを教えれば、言うことは聞いてくれるんだけど。
なんというか、子供っぽくないのよねぇ。
他の子たちとは全然違うわ。
でもそんなヨルも夜には子供らしい一面を見せてくれる。
ヨルは甘えん坊さんだ。
普段はクールだけど、寝る時は私にギュッと抱きついてくる。
寝顔も、いつもみたいな澄ました顔じゃなく、安心しきった表情をしてる。
それを見ると、いくら言動が大人びていようがこの子は小さな子供なんだと思い出す。
本当に愛おしい、私の宝物。

狼と返り血

王国で予言がなされた。
それは、これから生まれる小さの命の予言。
とある夫婦の間に生まれる赤子は、悪魔を宿している。
その子はやがて、魔王となり王国を脅かす存在となるだろう。
王国は夫婦を探し出し、そのお腹に宿った命を消そうとした。
夫婦は激しく抵抗した。
これから生まれるであろう子供を手放すことを拒んだ。
その結果、王国兵と衝突し、夫はその命を落とす。
妻は、夫の稼いだ時間を使い、王国から逃げ、姿を消した。
王国は今でも探している、姿を消した妻を、生まれたであろう悪魔の子を……

◇◇◇◇

今日も今日とて私は人間の子供と遊ぶ。

今日のお相手は私より年上の男の子3人と、女の子だ。
一番デカイ男の子がリック、次に大きいのがトーマス、小さいのがルーカスと言う名前らしい。
それで女の子の方がエリーというそうだ。
最近はこの組み合わせで遊ぶことが多い気がする。
まぁ、名前は覚えられるんだが、どうにも顔の判別が……
身体の大きさで覚えればいいか。
「今日の勇者役は俺〜！」
それで何をして遊ぶかというと、ごっこ遊びだな。
よくわからんが、この村の子供達はみんなこうやって遊んでいるようだ。
子供たちに特に人気なのが勇者の物語で、男の子たちはこぞって勇者をやりたがる。
いまもリックが棒切れを振り回してアピールしている。
私が立候補する役は、もちろん魔王に決まっている!!
当然だ。
私は魔王なのだからな！
「はい、ヨルちゃんはお姫様ね〜」
だがエリーが無慈悲な決定を下す。

なんだと!?　なぜ私がお姫様なんだ！　お姫様なんて柄じゃないだろ私!?
抗議しようと口を開くが、それを遮るようにエリーが続ける。
「ヨルちゃんはお姫様、ね？」
笑顔の圧力を感じる。
どうやら私はお姫役らしい。
うむむむ、毎回こうだ、私がお姫様役をやることになる。
「いいか、今日こそ俺たちが魔王を倒すぞ!!」
「「おう!!!」」
結局リックが勇者、トーマスが騎士、エリーが聖女、魔王はルーカスになった。
ルーカスはこの中で一番喧嘩が弱いので、いつも魔王役をやらされている。
ルーカスも勇者役をやりたいのか不満げだ。
がんばれルーカス、私は魔王好きだぞ！魔王だったし。
こうしていつも通り遊びが始まる。
といっても私はお姫様役なので特にやることはない。
ごっこ遊びとはいえ、勇者と魔王の戦いは前世を思い出させる。
私が魔王として製造された時には、もう人間がだいぶ優勢で魔族の領土はほとんど占拠されていた。

今、かつての魔族たちはどうしているのだろうか？
全員死んでしまったのだろうか？
それともまだどこかに隠れているのか？
まぁ、人間になってしまった私には、関係のない話か。
私はいつものようにお姫様用に用意された椅子に座って応援しているだけだ。
しばらくすると、勇者と魔王の対決も終わり、お昼の時間になる。
みんなそれぞれ家から持ってきたお弁当を食べる。
私も母親に持たされたサンドイッチを取り出す。
食事。
正直めんどくさい。
私が人間になって不便だと思っていることの1つだ。
魔王だった頃は直接大地から魔力を吸い上げ、栄養にしていたのだが、人間の身体ではそれができない。
わざわざ調理し、咀嚼し体内にいれて分解しなければいけないとは。
人間とは面倒なことこの上ない。
「なぁ、午後は森の方行こうぜ！」
食べる中、トーマスが提案した。

さっきまで遊びまわってたというのに口を開けばまた遊びの話か、元気な奴らめ。
私はサンドイッチを食べながら、黙って聞くことにする。
私が何も言わなくても、どうせ私も一緒に行くのは決定事項だろうし。
森で木のみを拾って持ち帰れば母親も喜ぶだろう。

森の中に入ると、そこは鬱蒼とした雰囲気に包まれていた。
木々の間からは光が差し込み、地面に生える草花には蝶などの小さな生き物たちが飛び回っている。
「花冠作りましょう」
エリーがそう提案してきたので了承する。
男の子たちは木登りでもするのだろう、私たちから離れていった。
せっせと花冠を作る。
この作業にも慣れたものだ。
「ねー、ヨルちゃんって誰が好きなのぉ～？」
「ん？」
エリーの唐突な質問に、思わず手が止まる。
「母親が好きだが？それがどうかしたか」

「ちが～う。あの3人の中でよ！」
あの3人とは、さっきのごっこ遊びで一緒になった男子3人の事だろうか。
別に好きも嫌いもない。
とゆうより、私はその3人の顔の見分けすらつくか怪しいのだが……
人間の子供という奴はどうしてこう順位をつけたりしたがるのだろう。
不思議でしょうがない。
「ね～え～」
しつこいエリーの追求が続く、私の服を掴んで揺さぶってきた。
やめろ！服が伸びるだろうが。
仕方ないから適当に答えてやるか、誰がいいかな……
「ルーカスだな」
彼は子供たちの中で一番魔王役を引き受けている。
つまり一番私に近しい存在と言っても過言ではない。
「え、ちょっと意外。あんなチビのどこがいいの？」
「チビ？ルーカスの身長は私より高いと記憶しているが」
子供の価値観はよくわからないな。
背が高いとか低いとかいうことに、何か意味が生まれるのだろうか？

だとするとこの中で一番小さいのは私だぞ。
もしかして遠回しに馬鹿にされてる???
そんなことを考えていると突然あたりに悲鳴が響き渡った。
「ぎゃゃあああッ！」
声は男の子たちが向かった方向から聞こえてきた。
見ると、３人がこちらに向かって走ってくる。
その後ろには大きな狼が迫っていた。
狼？
この森でそんなものは初めて見た。
「助けてぇ!!」
「早くッ！早くッ!!」
「こっちだ!!こっちに逃げろ!!」
３人は必死の形相だ。
だが、あれでは狼の方が速いな。
「あ!!っぐ」
一番足の遅いルーカスに狼が飛びかかり、引き倒す。
狼の牙が肩口に突き立てられた。

「ぎぃやぁぁ!!」
「ルーカス?!」
ルーカスは噛まれたまま引きずられていく。
仲間のいる縄張りまで持って帰るのだろう。
……なるほど！今わかった。
背が低いと足が遅いから人気がないんだな。
私は1人でウンウンと頷く。
人間の価値観は一見複雑だが、このように何事にも理由があるのだな。
「ちょっと!!なに見てんのよ、助けなきゃ」
エリーが私の服を引っ掴んで駆け出す。
だから、やめろ！服が伸びるだろ。
男の子2人はルーカスの腕を掴み、狼から引き離そうとしている。
あ～あ～、あれでは傷が広がってしまうぞ。
案の定、ルーカスの肩口から血が吹き出し、地面に滴り落ちる。
痛みにむせび泣く少年の声を聞きながら、私はぼんやりと考える。
私はどうするべきだろうか？
今ここで狼を殺すことはできるだろうが、この狼は別に食事をしているだけだ。

私が先ほど食べたサンドイッチのように、オオカミはこの少年を食料として食べようとしているだけなのだ。
弱肉強食、魔族ではそれは普通だったが、人間は違うのだろうか？
「ヨル！手を貸して、ルーカスが連れて行かれちゃうぅ」
エリーが少年たちに加わりながら、叫ぶ。
私はどうすればいいか決めかねて、突っ立っていた。
「ヨル！ヨル！ルーカスのこと好きなんじゃないの!?」
エリーがさらに切羽詰まったように大きく叫んだ。
好きというか、お前が無理やり聞いてくるから適当に答えただけなのだが。
大体好きだからなんだというのだ？
「好きだと殺していいのか？」
「何言ってんの!?、好きなら、守らなきゃ！取り戻さなきゃ！」
なるほど、人間の価値観だとそうなるのか。
確かに重要なものなら守らなきゃいけないな。
私は狼の元に歩み寄ると、その首元に手をかざした。
グチャッッ！
勝負は一瞬だった。

一瞬にして、狼の首が弾け飛び頭と胴体が離れる。
それを見ていた子供たちがポカンとした表情で立ち尽くしていた。
ルーカスはと言うと、泣き叫びながら自分の肩口に噛み付いている狼を引き剥がそうとしていた。
私はその様子をただ黙って見つめていた。
思ったより柔いな。
魔力を当てただけでこの有様とは。
返り血が飛び散って驚いてしまったくらいだ。
……ん？
返り血？
見下ろすと私の服には狼の血がべったりついていた。
やばい、これ怒られるやつだ。

この狼の騒動は大人たちの間で結構大事になった。
大規模な狼狩りが敢行され、近隣の村からも討伐隊が派遣されることになったらしい。
子供は当分森へは出入り禁止。

私は大人たちの会議に呼ばれて、色々と聞かれたが、正直に答えても誰も信じてもらえなかった。
結局、狼がなぜ死んだのか大人たちには解明できず、私は解放された。
服を汚したことで、怒られると覚悟していたが、母親は特に何も言わなかった。
そのかわり、痛いくらいキツく抱きしめられたが……

あと、気付がいたらなぜか私がルーカスを好きという情報が広まっていて。
村中から小さなカップルとして祝福された。
な・ぜ・だ!!!!
母親がものすごい怖い顔で微笑んでいたので近寄らないでおいた……

特別なアクセサリー

「魔王様、見てくださいこの捕虜を、立派な物でしょう」
魔族の男に話しかけられ、私は顔を上げた。
見ると、男女の人間が鎖で繋がれ、私の前で転がっていた。
２人はボロ雑巾のような有様、男の方は衣服を剥ぎ取られ、体中に痛々しい傷跡が残っている。
「我が軍を苦しめてきた、騎士と魔術師の２人組でございます」
嬉しそうにそう言うのは魔王軍の幹部の一人であるザハだ。
私はそれを興味なさげに見つめ、視線をそらした。
ザハはそんな私を気にすることなく続ける。
「服従の鎖で縛ってもよし、見目が気に入ったのなら魔王様の召使にしてやってもいいですぞ」
「人間の美醜はわからん、他と同じように２人一緒に洗脳し、戦力にしろ」
私が命令すると、ザハが慌てて止めてくる。
「魔王様、２人一緒はまずい、ダメですぞぉ」

……？

何がいけないんだ？

「この２人は夫婦です、一緒にするより引き離してお互いを人質にとった方がよく働きますぞぉ」

……そうなのか？

「見てください魔王様」

ザハが２人の手を指差す。

２人の指にはお揃いの指輪がはめられていた。

「おい、装備は全部回収しろと命じたはずだ、なぜ指輪をつけている」

「あ～っ、いけません、いけませんぞ魔王様！」

なぜ止める、魔法具かも知れないだろうが。

私は少しイライラしながら幹部を睨む。

ザハは慌てる様子もなく、淡々と説明を始める。

「魔王様、人間魔族かかわらず、男女がアクセサリーを贈り合うのはとても特別なことなのです。これを残しておくだけで、捕虜の心は慰められ、より長く使うことができるのですよ」

そ…うなのか、ぜんぜん仕組みがわからないのだが。

疑問を浮かべる私を見てザハはため息をついた。
「魔王様、あなたに戦闘の知識を入れたのはよかったですが、感情に関する知識を与えなかったのは失敗でしたね……」
失敗だと思うなら今からでも教えてくれよ。
私はそう訴えたが、その後感情を教えてもらう機会はついぞ訪れなかった。

◊◊◊◊

私が生まれてから8年の月日がたった。
相変わらず毎日は退屈だが、悪いことばかりじゃない。
最近、本を読むようになった。
人間の感情を勉強する上で、本がとてもいい教材になると気がついたのだ。
見るだけではわからない人間の心の変化が本には書いてある。
どんな時に人間は喜ぶのか、悲しむのか、怒るのか、笑うのか。
人間を観察しているだけではわからなかったことがよくわかる。
本を読むことで、私の人間に対する理解は飛躍的に深まったといえるだろう。
私が愛とやらを理解する日も、そう遠い未来ではあるまい！

そんなことを考えながら、今日も読書に勤しんでいると、家の扉が乱暴にノックされる音が聞こえてきた。
誰だ、せっかく人が気持ちよく読書をしているというのに。
まぁ、どうせあいつらだろうけど。
扉を開けると案の定そこにはいつもの４人組がいた。
リック、トーマス、ルーカス、エリーだ。
ここ3年で私たちの仲はさらに、深まった、のか？
よくわからん。
少なくとも私以外のこの４人は前より親密そうに見える。
私も顔の見分けはつくようになった。
一番の変化は身長だろう、前は全員同じぐらいだったが、今ではもうだいぶ差がついてきてしまっている。
特に男3人が成長著しい。
４人の中で一番背が低かったルーカスは今では一番背が高く、私と頭ひとつ分は差があった。
他の2人も背が伸びており、私は今や彼らを見上げる形になっているのだ。
「本ばっか読んでないで遊ぼうぜ」

リックはいつものように私の手を引っ張って外に連れ出そうとする。
おい、こら、引っ張るんじゃない。
なんでどいつもこいつも私を引っ張るんだ？
「村はずれの広場に行商人が来てるのよ」
エリーが嬉しそうに言う。
ふむ、それには少し興味が湧いた。
「本は、あるか？それかアクセサリー」
私は期待を込めて聞いてみた。
もしあれば欲しいものだ。
この村で、本やアクセサリーの類を手に入れるのは難しい。
この村では作られていないからだ。
よってそれらを手に入れるには他の街から来る行商に頼るしかないのだ。
「さあね、行ってみないとわかんねーよ」
トーマスが面倒くさそうに言った。
なるほど、それもそうだな。
私は本をしまうと、みんなについて家を出た。
「ごめんね、いつも」

ルーカスが申し訳なさそうな顔で言う。
こいつは見てくれは大きくなったが、中身は変わらないな。
人間流の表現で言うと、優しいやつ、という感じ。
私流に表現するなら、気弱なやつ、になるのだが。

広場に着くと、そこには確かにいくつかの露店が並んでいて、人で賑わっていた。
しかし、本屋は見当たらない……残念だ。
ではアクセサリーはないかと探してみるが、やはり見つからず落胆していると、ルーカスが服の袖を引いた。
なんだ？と振り返ると、彼は目を輝かせて商品の一つを指さしていた。
それは綺麗なペンダントだった。
装飾の施された銀細工の鎖の先に、小さな赤い宝石がついている。
なかなか洒落たデザインだ。
私はそれを手に取って眺めた。
私の瞳と同じ赤色……
いい、すごくいい。
喜んだのも束の間、私は値段を見て固まった。

銀貨1枚だと!?　こんな小さな石がついただけのペンダントが、どうしてそんな高いのだ！

……わけがわからん……私そんなに持ってないよ……

私はしぶしぶとそのペンダントを棚に戻した。

結局、私は何も買わなかった……

「なぁ、あれを見ろよ」

私が未練たらしく、歩いている帰り道、トーマスが声を上げた。

見ると騎士が数名馬に乗ってこちらに向かってくるところだ。

「騎士だ！俺初めて見たぜ」

「行商人の護衛かしら」

リックが興奮気味に言い、エリーが推測した。

確かに今回の行商は規模が大きかったから、その護衛と言うのは納得できる。

彼らはそのまま私たちの前を通り過ぎていった。

輝く白銀の鎧、腰に刺した剣、そして彼らの纏う村の門番とは違った高貴な存在感。

私たちはしばらくその姿を目で追った後、お互いの顔を見合わせた。

なんだか特別な物を見たような気がする。

私は沈んだ気分も忘れみんなとはしゃぎながら帰路に着いた。

「ねぇ、ヨル」
いつもの広場までたどり着いた時、ルーカスが私を呼び止めた。
見ると、ルーカスはなんだかモジモジしている。
他の3人もニヤニヤしながらルーカスを肘でつつき合っている。
……？
なんだこいつら？なにか妙な雰囲気だな。
「あの……こ、これ……」
そう言ってルーカスが差し出してきたのはあの銀細工のペンダントだった。
ドクンッと私の心臓が跳ねた。
なんで…これがここに？
「君に、受け取って欲しいんだ」
私に……？　くれるのか……？　このペンダントを？　銀貨1枚だぞ……!?
私は困惑したようにルーカスを、他の3人を見る。
ルーカスは真剣な眼差しでこっちを見ている……他の3人は私を安心させるようにうなずいた。
おずおずとペンダントを手に取る。
それは私の手の中で揺れ、キラキラとした輝きを放った。

「ありがとう……母親も喜ぶよ」
「……ん？」
「あれ？」
「……うん？」
「はぁ？」
私の言葉になぜか4人とも素っ頓狂な声を出した。
「えっと……なんでそこでヨルのお母さんが出てくるのかな？」
ルーカスが困り顔で聞いてきた。
他の3人も不思議そうに私を見ている。
なぜって言われても……
「ずっと、母親にプレゼントするアクセサリーを探していたんだ！これは母親にぴったりだ、ありがとう！ルーカス！」
その言葉を聞いた途端、ガクゥっとルーカスが地面に膝をついた。
他の男2人も慰めるように肩に手を置いている。
なんだ？
私何か変なこと言ったか？
「……はぁ……ヨル、それはルーカスが君につけて欲しくてプレゼントしたのよ」

なに？そうなのか……？
私は改めて手の中のペンダントに視線を落とす。
私なんかを着飾ってなんの意味があるんだ???
「ほら、瞳の色とお揃いですごく似合うわよ」
エリーがそう言うと、みんなが同意するようにうなずく。
ええ……
「お母さんのプレゼントはまた別の機会にしようぜ、な？俺たちも探すの手伝うから」
むぅ……そこまで言うのなら仕方がない。
私はしぶしぶとペンダントを身につけた。
みんながほっとしたように一斉に息をつく。
むぅ……なんか納得いかん。
私は改めてペンダントのお礼を言うと、家路についた。
家に帰ると母親が私の身につけたペンダントを見て嬉しそうな顔をしてくれた。
似合っていると褒められ、嬉しくなった私はルーカスがプレゼントしてくれたと明かす。
そうしたら笑顔だった母親がスンッと無表情になったのだが。
母親よ、その表情怖いからやめてくれ。

◇◇◇◇

……？

……なんだろう……？

…なんだか……なつかしい感じが……する……

私は目を覚ました。

辺りはまだ薄暗い。

外からかすかに馬の嘶きが聞こえる。

隣で眠る母親を起こさぬよう、静かにベットから出る。

なんとなく、枕元に置いてあったペンダントを手に取り身に着ける。

外に出ると、昼間とは違いひんやりとしていて少し肌寒い。

灯はどこにもなく、闇だけが広がっていた。

やっぱり……何か感じる、なつかしい何か。

私はその感覚に導かれるように歩みをすすめた。

普段みんなと遊んでいる広場に、人影があった。

浅黒い肌に白い髪、ねじくれた角が、夜風に晒されていた。

その男はじっと空を見上げている。
「……魔族」
懐かしいと感じていたのは、彼の気配だった。
今世では初めて会う、魔族。
どこにもいないから、もう死滅してしまったのかと思っていた。
嬉しかった。
魔王だった頃の私を思い出させる存在が、まだ残っていたなんて。
「こんばんは！」
だから、私は彼に声を掛けた。
彼はゆっくりとこちらを振り向く。
その銀の瞳も、酷く懐かしかった。
私はまるで魔王に戻ったかのような気分になって、彼に歩み寄った。
無防備に。
「こんな寂しい夜は、血を見たくなるな」
「うん？」
魔族の男の手が振りかぶられる。
その手に握られた刃の煌めきを私は惚けて見ていた……

貫く剣

魔族の男が脱走した。
その魔族は辺境の地で発見された。
騎士のいない辺境で暴れまわった魔族は、騎士が派遣されるまでの間、多くの人間を殺した。
だが苦労して拘束したのにも関わらず、彼は移送中に忽然と姿を消した。
今、騎士団はその失敗を取り戻そうと躍起になっている。
王都の騎士である私が、こんなど田舎の村まで呼び出されたのもそのせいだ。
なんでもこの村の近くで魔族の目撃情報があったらしい。
平和な村だ。
今も子供たちが遊びまわっているのが見える。
もし、この村に魔族が侵入したら……考えただけでゾッとする。
この村を守らなければならない。
これ以上魔物の好きにさせるわけにはいかなかった……
村人に聞き込みをしていると、一人の女の子が目に入った。

年の頃は１０歳くらいだろうか、他の子より少し大人びていて、どこか達観したような雰囲気のある子供だった。
赤い瞳、どこか血を思わせるその色に私は薄寒いものを感じた。
いや、気のせいだ……ただの子供相手になにをビビっているんだ私は。
私は彼女の前を通り過ぎると聞き込みを再開した……

確かに、魔族らしき男の目撃情報はあった。
だが、肝心の魔族の居場所は掴めなかった。
「よぉ、今日はもうお開きにして、一杯やらねぇか」
同僚の誘いを、私は断る。
よく、真面目だとか融通が利かないとか言われるが、これは性分だ、仕方ない。
同僚たちは諦めたようにため息をつくと、明日また頑張ろうと励ましてくれた。
そんな同僚たちを置いて、私は村の巡回を続ける。
いつ、魔族が現れるかわからない、私には人々を守る騎士としての使命があった。
人々が寝静まった後にも、私は目を光らせていた。
「……？　……っ！」
何か、音が聞こえた。

微かな物音、聞き間違いではない。
これは、金属が鳴る音……剣がぶつかり合う、あの独特の音が聞こえる。
誰かが……戦っている!?

◊◊◊◊

魔族の刃が自分に迫るのを私は惚けて見ていた。
……あれ？
私攻撃されてる？
なんで？
こいつ……
この魔族……

馬鹿か???

ガイィンッッ！
私の防御術式がヤツの刃を弾き、甲高い音を立てる。

「!!」
魔族の目が驚きで見開かれる。
「私が人間だから!術式は使えないとでも思ったか!」

一般的に、人間は魔法を、魔族は術式を使う。
魔法とは、自分の中で魔力を練り上げ、それを外部に放出する技術のことだ。
対して術式とは、魔力によって術式を編むことで様々な効果を発動させる。
その場で放出する魔法と違い、術式は事前に作成し任意のタイミングで発動することができる。
術式とは、言ってみればより高位の魔法、魔法の上位互換なのだ。
ならなぜ人間は術式を使わないのかというと、そこには生物的な違いが関係している。
人間は、魔力を知覚することができないのだ。
そのため、魔力は持っていても、それで術式を描くことができない。
それは人間になってしまった私も例外ではなく魔力を知覚することはできない。
だがしかし、私には魔王だった頃の戦闘知識がある。
頭が、心が、数多の術式を記憶している。

目では見えずとも、どう魔力を編めば術式が完成するか知っている！

「この無礼者を引き裂け」
私は攻撃術式を起動する。
魔力で形作られた無数の剣が魔族に襲い掛かる。
「クッ!!」
魔族は慌てて回避するが、それは悪手だ。
術式がさらに起動し、剣の数が一気に増える。
「チィイイッ！」
舌打ちをして、魔族は刃をふるうが、刃一本で対処しきれる数ではない。
魔族の体にいくつもの傷が生まれる。
「どうした!?お前も術式を使わなければ死ぬぞ?」
私は挑発するようにそう言うと、再び攻撃を繰り出す。
「クソがぁぁッッ!!」
魔族は苛立たしげに叫ぶと、私に向かって飛び掛かってきた。
その四肢を私の刃が貫き、地面へと縫い止める。
「ぐぎゃあああっ!!……アアっ！……ッッッッ!!!」

敗者の悲鳴が心地よい。
戦闘の高揚感も、嗜虐感が満たされるこの感覚も久しぶりだ。
……だが、なぜこいつは術式を使用しなかった？
男の髪を掴み、その顔を持ち上げる。
ふむ、なにやら首に禍々しい首輪が嵌めてあるな。
これはあれか、人間様お得意の魔力封じというやつか？
つまり私は術式の使えぬ、人間以下の男をいたぶって喜んでいたということか？
つまらんな、興醒めだ。
「あー、もういいや」
死ね。
私がそいつの首筋に剣を叩きつけようとした瞬間。
「待てっ!!」
静止の声と共に、白銀が閃き、私の剣は弾き飛ばされた。
「騎士か……」
騎乗した騎士が私の目の前に立っていた。
「これは……これは君がやったのか？」
騎士は、私の周りに浮遊する剣を、地面に縫い付けられた魔族を信じられないといっ

た表情で見つめている。

まぁ、こんな女児が高度な術式を行使していたら驚くのも無理ないか。

私はドヤ顔でフフンッと微笑んだ。

「なんと言うことだ……

聖女だ！　こんな村に聖女がいたとは!?」

うん……？

あれ？

いや私、私魔王だけどぉ

???????????!!!!????

聖女と悪魔の子

私の考え不足だったのかもしれない。
「ですから、聖女として彼女を王都に連れて帰ります」
不味いことになった。
今、私は村長の前に座っている。
私の右隣には私を聖女呼ばわりした騎士が。
左隣には母親が座っていた。
私が1人で魔族を撃退したことが、まさかここまで大事になるとは思わなかった。
ただ襲いかかって来たから蹂躙した、久しぶりの暴力に酔っていたのかもしれない。
「この娘が本当にあの魔族を倒したのか？」
村長の問いかけに、隣の騎士が答える。
「間違いありません。この娘の使った魔法は間違いなく聖女のものです。私が駆け付けた時には、既に決着はついていました」
騎士が自信満々に答える。
私の術式が聖女の魔法ねぇ……

聖女とは神に祝福され、奇跡を起こすとされる少女のことだ。
聖女はその身に常人ではありえないほどの魔力を宿し、魔法の存在も知らない幼子のうちから、大人でも使えないような強力な魔法を使うことができる。
そして、聖女の使う魔法は既存の魔法とは異なり聖女のみが使える固有の魔法となる。
聖女固有の魔法は、その代ごとに異なる。
飢えた民が多いときは、作物を育てる魔法となり、枯れた大地を潤した。
戦争の多い時代には、武器を強化するための魔法、平和の時代には、傷ついた人を癒やす魔法を使う聖女が現れた。
時代ごとに、神が必要な力を与えるのだと言われている。
今代の聖女は……　確かにまだ現れたという話を聞いたことがない。
私の術式はそもそも魔法ですらないので既存の魔法とは確かに異なる。
それでいて、私はまだ幼い女児ときた。
確かに……私は聖女の条件に……当てはまる……かもしれない。
認めたくはないが……
「信じられんが……しかし、現に未知の魔法で魔族は倒されている。ならば、この娘を認めぬわけにもいくまい……」

村長が渋々と納得し、ため息をつく。
「それでは！」
騎士の顔がパッっと明るくなる。
「ああ、この娘を王都に連れて行くがいい」
「ちょっと待ってください！」
村長の言葉に母親が悲鳴のような声を上げる。
「この子はまだ8歳なんですよ！そんないきなり王都に連れて行くなんて！」
母親としては当然の反応だろう。
こんな小さな子を親元から引き離すなんて普通のことじゃない。
そのくらいは私でもわかる。
だが、聖女の出現こそ普通のことではなかった。
「その年齢だからこそだ、しっかり勉強していただき、立派な聖女になっていただくのだ」
騎士は聞く耳を持たない。
母親は諦めたように俯いた。
私は何も言えなかった。
自分の引き起こした事態に動転していた。

……正直、このまま連れて行かれると困る。
というか……いやだ。
嫌だった、母親と離れるのが、この村を出ていくことが。

「……」
その日の食卓は、沈黙が続いた。
いつもだったら、今日は何をして遊んだとか、近所でおきた面白い話だとか話題は尽きないはずなのに。
母親が、何かを言いかけて、口をつぐむ。
その繰り返し。
私も自分の中に芽生えた感情に戸惑っていた。
魔王だった頃私は何かに愛着を持つことはなかった。
幹部の魔族も、配下も、手下も、所詮私にとってはただの駒でしかなかった。
そんな私がこの生活を手放すのを嫌がっていた。
私は生まれて初めて感じる感覚にどうすればいいかわからなくなっていた。
寂しい？悲しい？辛い？苦しい？　わからない。

ただ、胸の奥が冷たくて、もどかしくて仕方がなかった。
「ねぇ……ヨルちゃん、お話、聞いてくれる？大事なお話」
食事を終え、部屋に戻った私に、母親が話しかけてきた。
大事な話というのは、きっと私のこれからのことだろう。
話したくなかった。
私の表情を見た母親の瞳が揺れる。
でも、一度目を閉じて、再び目を開いた時の母親の表情は覚悟を決めたものだった。
「ヨルちゃんはね、悪魔の子、魔王になる存在だって予言された子なの」
「え……」
ドクンッと心臓が跳ねた。
私が魔王になる存在だと……予言されていた？
「嘘なの、そんな予言は。でもね誰も信じてくれなかった」
嘘じゃない。
確かに当たっている、だって私は魔王の生まれ変わりで……
その先を聞きたくなかった。
「みんな、ヨルちゃんを殺そうとした、だから私とあの人、ヨルちゃんのパパはね、戦ったの」

聞きたくない、もうやめて欲しかった。
この先に続く話を想像してしまう、わかってしまう。
そう思っているのに、私の身体は動かない。
耳を塞ぐこともできない。
まるで金縛りにあったかのように、全身が固まっている。
「あの人は、死んでしまったの、私たちを守るために」
ああ、ほらやっぱり。
母親の、この人の大切な人は私が殺したんだ。
私は自分はただ生まれ変わっただけだと思っていた。
自分がこの世界に生まれ落ちる影響なんて何も考えてもいなかった。
「ヨルちゃんがあの時の子だって、絶対バレてはだめ」
母親は涙を流していた。
それでも話すのをやめてくれない。
「聖女という身分が、ヨルちゃんを隠してくれる。貴族の姓は絶対名乗らないで、私の名前も出しちゃダメ」
どうして、私なんかのために……
私はあなたの思っているような人間じゃない。

「私……」
私は魔王の生まれ変わりなのに。
あなたが思っているような娘じゃないのに。
全てをぶちまけたくなる。
そんな衝動が溢れてくる。
「私……私……よくわからないや」
でも、言えなかった。
言えるわけがなかった。
だって私はまだこの人の娘でいたかったから。
「ヨル……ううん、ゴメンなさいね。急な話だものね、わからなくても仕方がないわ」
母親は優しく頭を撫でると、そっと抱きしめてくれた。
嘘をついて、温もりを得ている。
そんな自分に吐き気がする。
お父さんが死んだのは、私のせいだった。
わたしが愛を知りたいと願ったから。
この世界が私の望みに応えてしまったから。
胸が、痛い。

たった一人の人間が死んだだけ。
魔王の頃の私だったら何も思わなかったのに。
今は違う。
心が軋んで悲鳴を上げている。
なんで、こんなに苦しいんだろう。
誰か教えて欲しい。
これが愛を知る代償だというのなら、そんなものいらない、望んでない。
私は母親の腕の中で、声を殺して泣いた。
産声すらあげなかった私が涙を流していた。
もしかしたら、それが私が人間として初めて産声を上げた瞬間だったのかもしれない。

翌日、私は村を出た。
荷物は最低限のものだけ。
村の子供たちは全員で見送りに来てくれた。
いつもの４人も、私を見送ってくれる。
この村でずっと暮らしていくと思っていた。

彼らと、明日も、その次の日も、遊べると思っていたのに。
「ヨル！」
ルーカスが私を呼び止める。
「僕、王都に行くよ、絶対。ヨルに会いに行くから」
会いに来る。
その言葉だけで、救われた気持ちになった。
また、遊べるだろうか。
なんと言えばいいかわからず、私は黙って頷いた。
彼らは笑顔で手を振って見送ってくれた。
当たり前だ、村の子供から聖女が見つかる、めでたいことなのだ、嬉しいことのはずなのに……
馬車に揺られながら私は窓から外を見る。
村が小さくなっていく。
銀細工のペンダントが、私の胸元で揺れていた。

聖女ヨル

自分が生まれて来たことには意味があるのではないだろうか。
最近私はそう考えるようになった。
自分が、父親をただ無為に殺しただけだとは思いたくなかった。
私の人生には父親の死を背負うに値する意味がある、そう思わないとやりきれなかった。
魔王としてではなく、ヨル・ヴァ・リデルとして生まれた意味を探していた。
だから私は……
だから私には……
礼儀作法などという意味のわからん物に割いている時間などない!!!!
「ヨル様背筋が曲がっております」
教育係の女の叱責が飛ぶ。
知るか!こちらと前世では魔王だったんだぞ!?
なぁぜ人間なぞに媚び諂わねばならん。
私に礼儀正しくして欲しいならまず私がそうしたいと思えるだけの実力を示せ!

と、叫びたくなるのをなんとか抑える。
母親は聖女の身分が私を守ると言っていた。
ここで聖女失格の烙印を押されるのも本意ではない。
荒れ狂う感情をなんとか押さえ、背筋を伸ばす。
ほら、どうだ？これで満足か？
「反りすぎですヨル様、胸を突き出して男でも誘惑してるんですか？」
女の教鞭がペチッと私の背中を叩いた。
「……」
ぐわあぁぁぁっぁぁっっっっ!!
なんなのだこいつは！
嫌い嫌い！嫌い！嫌い！嫌い！嫌い！大っきらい!!!
この女、何度私の愚弄したら気が済むのだ。
大体こいつ私がド田舎の村の平民出身だからって馬鹿にしてるだろ。
こんな女が私の教育係とは……地獄だ。

「ふむ……歴史、算学は申し分なし、ですが礼儀作法やダンスは……はぁ、これは

なかなか酷い」

私の前で、男が報告書に目を通しながら深いため息を吐いた。

こいつは俺を連れ出した騎士の男だ。

ロレンス・リラ・ハモン。

騎士団に所属していたこの男はどうやらかなり身分の高い貴族だったようだ。

後ろ盾のない私は、不本意ながらこいつの養子となった。

聖女が、平民なのはさすがに体裁が悪いらしい。

私が聖女としてやっていけるのか、それを確認しにこうして月に一回は屋敷に訪れる。

「社交界にデビューするのにこの調子では困ります」

困ればいい。

と内心では思いつつ、私は殊勝な態度で頭を下げる。

「練習はしている。以前よりはだいぶ良くなったと思うが」

「その言葉遣いがもうすでに問題ですね。ヨル様は女性なのですからもう少しお淑やかな口調の方がよろしいかと思いますが……」

なぜ口調といい、服装といい、私に女らしくするのを求める。

いや、まぁ……女なんだけど。

どうにも慣れないというか、村では好き勝手に振る舞っても何も注意されなかった弊害がここに来て出ている。

「すみません。気をつける、ます……わ」

ダメだこれ、全然うまくいかない。

「はぁ……まぁ、1人ではどうにもならないこともあるでしょう。そろそろ頃合いかと思い、あなたに侍女をつけることにしました。彼女からいろいろ学んでください」

「え？」

侍女？それってあれか、魔王だった頃にいた召使みたいなやつか？

首を傾げていると、扉の向こう側からノックの音が聞こえた。

入って来たのは13、4歳くらいの女の子だった。

赤みを帯びた金髪を後ろで束ねた可愛らしい顔立ちの少女。

その立ち姿は私が見ても惚れ惚れするほど綺麗で整っていた。

「リア・ラ・ハーミットと申します。本日よりヨル様お付きの侍女となりました、よろしくお願いします」

彼女はスカートの端を持ち上げて優雅に礼をした。

「彼女も一応貴族だから、立ち振る舞いは彼女から学ぶと良い」

なん……だと？

私にああなれと？
1目見ただけでわかる、彼女の身のこなしは私とは段違いだ。
もし、この騎士野郎がこのレベルを求めているのだとしたら……
私は静かに絶望した。

「ヨル様は自由時間はどのようにお過ごしで？」
リアと名乗った少女は私の側に控えて優雅に微笑んでいる。
部屋に戻るとすぐに私は彼女に問いかけられた。
「読書だ。別にお前に頼むことはないから好きにしていいぞ召使い」
私は椅子に座って頬杖をつきながら答える。
「め、召……オホンッ、私は侍女でございますヨル様。読書でしたらお茶をお持ちいたしましょう」
おお！気がきくな、紅茶を持ってきてくれるのか。
こうして他人に奉仕されると、なんだか魔王の頃に戻ったみたいで気分がいいなぁ。
そんなことを考えながらリアがお茶を準備する姿を眺める。
「どのようなご本を読んでいるのですか？」

そう言いながら、リアは紅茶を差し出す。
紅茶のいい香りが漂う。
最近香りのよさというものがだんだんわかってきた。
相変わらず食事はめんどくさいと感じるが、お茶は嫌いではない。
「最近は恋愛小説が多いな、全く理解できないが」
「はぁ……」
リアは不思議そうな顔をして私を見つめる。
「なぜ人間は仲良くなると接吻したがるんだ？唇と唇を重ねると何かあるのか？意味がわからん」
私の疑問に、なぜかリアは頬を染める。
「あ……の、そのような本は……まだヨル様には早いかと……」
その言葉に思わず眉をひそめる。
またか、村人と同じような反応だなぁ。
まだ早いとか、大人になったらとか、一体いつになったらいいんだ？
ロレンスに愛とは何か聞いたら、この恋愛小説とやらをくれたのだが、まだ理解できない。
確かに私には早いのかもしれないなぁ……

私は理解できもしない小説を読み進めた。

「ヨル様、もう本日はお休みのお時間です」
気がつけば窓の外は暗くなっていた。
ふむ、確かにそろそろ寝るべきか。
リアは今日1日私の側についていた。
確かに、彼女の立ち振る舞いは参考になることが多そうだ。
「おい、どこに行くんだ？」
私は部屋から出て行こうとする彼女を呼び止めた。
「本日は上がらせていただこうかと思ったのですが、まだ御用がありますでしょうか」
「いや、お前が寝るのはここだぞ」
私は彼女をベットの中に引き込むと、ギュッと抱きしめた。
村にいた時は、毎日母親に抱きしめられて眠っていた。
でもここに来てから私は1人で寝るしかなかった。
1人で寝る夜はこんなにも寂しいと私は知らなかった。
だから召使いができた時嬉しかった。

一緒に寝れる人間がいる、これでもう寂しくない。

「ッッちょ！ええ？え゛、え゛、え゛、えぁぁぁぁ!!??」

なんか汚い声が聞こえるけどリアじゃないよね、彼女はどんな時も優雅だったし、こんな汚い声を出すわけがないか。

今日は久しぶりにぐっすり寝れそうだ!!

聖女になるという意味

リアが私の侍女となってから一ヶ月ほど経った。
あの日から心なしか距離感が近くなった気がする、毎日一緒に寝ているからだろうか。
私の身の回りのことは大体彼女がしてくれるので、とても助かっている。
私にお洒落はわからないので、服装や身支度も彼女に任せっきりだ。
とは言え、許せるものと許せないものがある。
「絶対嫌だ！」
私は今彼女の腕を掴んで、断固として抵抗していた。
彼女の手にはあの悪魔の道具、化粧道具が握られていた。
「聖女として人前に出るのですから。本日こそは絶対にお化粧させていただきます！」
嫌だ、それ好きじゃない。
なぜ顔に訳の分からないものを塗りたくらなければならない。
そう言ってもリアは頑なに譲らない。

いつもならここら辺で折れてくれるのだが、今日はなんとしても私を着飾りたいらしい。

「いーやーだーーー」

結局私はリアによって綺麗におめかしされてしまった。

「ほら見てくださいヨル様、お綺麗ですよ」

リアがホクホクした顔でこちらに鏡を向けてくる。

そこには真っ白なドレスを着た私が映っていた。

なんか嫌だ……

私は人間の美醜がわからないので、化粧をした自分の顔を見てもいつもと違う、としか思えないし。

いつも髪色に合わせて黒っぽい服しか着ていなかったのにいきなり白なのも違和感を感じる。

憂鬱だ。

唯一の救いはいつものペンダントをつけていることだけだ。

なぜこれだけ着飾っているかというと、今日は聖女として城下町に下り、孤児院へ慰問に向かう予定なのだ。

教育を受けるだけでなく、聖女としての威光をきちんと民に示さなければいけないら

しい。
聖女をやっていくのも大変だ。
とはいえ、数ある訪問先の中から孤児院を選んだのは私だ。
最近会うのは貴族の大人や教育係ばかりで、たまには私と同年代の子供に会いたくなったのだ。
「さぁ、参りましょうかヨル様」
リアが私に手を差し伸べる。
私はその手を握り、出発した。

「わざわざ御足労頂きありがとうございます。あなたがあの剣の聖女様ですか、お会いできて光栄です」
孤児院の院長は私たちを歓迎してくれた。
剣の聖女？
ああ、私が使った術式が剣の形をしていたからか。
私ってそんな呼ばれ方しているんだな。
「初めまして、ヨル・リデルと申します。本日はこのような機会を設けてくださり感謝

いたします。聖女としてまだまだ未熟者ではありますが、皆様の期待に添えるよう精進して参ります」

私はスカートを摘み上げ、頭を下げる。

横でリアが信じれれないものを見たような目で見てくる。

なんだよ、私だって挨拶ぐらいできるわ！

私の挨拶が終わると、子供たちがわらわら集まってきた。

孤児院に納める食料や衣服などはすでに用意してある。

今日私の仕事は、この子供たちと遊ぶことだ。

と言っても私より年上に見える子もだいぶいるけど。

「ねぇ～魔法を見せてよ聖女様～」

小さな男の子が私の腰にしがみつきながら言ってくる。

ふむ、魔法か。

見せることは簡単だが、剣では危ないだろう。

私はその場で術式を編むと銀色に輝く小鳥を数羽作り出した。

「ほら、捕まえてごらん」

私は小鳥たちを子供たちの方へと放つ。

キャッキャッと楽しげな声を上げ、子供たちは小鳥たちを追いかけ回した。

「すごい！蝶々もできる？」
女の子がキラキラした瞳で私を見つめる。
「もちろん」
私は小鳥を蝶へと変身させる。そして今度は空中で舞い踊らせる。
子供たちから歓声が上がった。
その日私は子供たちに言われるまま、色々な動物を作り続けた。

「ヨル様、そろそろ」
気がつけば夕方になっていた。
リアに声をかけられ、私は立ち上がる。
今日、私たちは近くの宿に宿泊することになっていた。
「ねぇ…」
その時、私の袖が引っ張られた。振り返るとそこには小さな女の子がいた。
青い髪をおさげにした可愛らしい顔立ちの子だった。
何かを言いたそうにこちらをチラチラと見ているが、言葉にならないようだ。
私はしゃがんでその子の目線の高さに合わせた。
すると彼女は意を決したように口を開いた。

「あの、聖女様に、プレゼントを渡したくて、でも恥ずかしいから、一人の時に渡したいの、夜にまた来れる？」
どうやら贈り物があるらしい。
私に渡したいもの……なんだろう？
「いいよ」
私は女の子とまた会う約束をした。
女の子はその小さな手を振った。

日も沈んだ頃、私は宿を抜け出すと孤児院を目指した。
少し遅くなってしまった。
女の子がもう寝ていないか心配だ。
夜の孤児院は昼間とは打って変わり、暗く、静かだった。
私は女の子を探してあたりを見渡すけど、姿が見えない。
代わりに、妙な気配が複数感じ取れた。
「おい」
後ろから声がかけられる。

振り返ると小柄な男が立っていた。
いや、後ろだけじゃない。
黒い影が6つ、いつの間にか囲まれていた。
「剣の聖女か？」
男の懐から長い曲刀が取り出される。
「いかにも、私が聖女だが。なんだお前ら」
私は臨戦態勢をとると、男を睨みつける。
男はニヤリと笑うと、叫んだ。
「やれ！」
次の瞬間、周りにいた奴らが一斉に襲いかかってきた。
全方位からの奇襲、これでは対応できない。
とでも思ってるんだろうな。
私は事前に作っておいた術式の鳥たちを奴らの背後から襲いかからせる。
「な、なんだこれは！」
突然のことに驚いたのか、襲撃者たちの攻撃の手が止まる。
その隙を逃すわけもなく、私は攻撃術式を起動する
「切り刻め」

無数の剣が空中に現れ、弧を描く。
同時に私は走り出し、一番体格の大きな男に蹴りを喰らわす。
吹き飛んだ仲間を見て、他の男たちが怯む。
「そら！そら！そら！」
剣が宙を舞い、男たちを切り刻み、その曲刀を叩き落とす。
「ば、化物め……！」
一人残ったリーダー格の男が私を指差す。
失礼な、聖女なのだが。
私は術式を解除し、両手を上げる。
これ以上戦う気はないと示したつもりだけど、相手は違う意味に捉えたようで、顔を真っ赤にして怒っている。
「貴様のような奴が聖女になるのは許されない！貴様が聖女だとは認めない」
どういうことだろうか？　なぜこいつはこんなにも怒ってるんだ？
私だって好きで聖女をやってる訳じゃない。
こんな奴らに文句を言われる筋合いはないぞ。
「貴様が聖女の座を降りぬというなら、こちらにも考えがあるぞ！」
男が叫ぶ。

私はそれを黙って聞いていた。
一体何を言うのやら。
こんな雑魚が私をどうにかできるとは思えなかった。
「貴様の強さはわかった、貴様を殺せぬというのなら、貴様の大事な人間を殺す。お前が聖女でいる限り1日に1人！」
「……は？」
私の思考は一瞬止まった。
今こいつなんて言った？
私の大切な人を、殺す？　私の大切、人……
母親…ルーカス……エリー、リック、トーマス、村のみんな……
それを、殺す、？。、だ、れを。殺すって。…、・??
ブチンッ
私の視界が真っ赤に染まった……

「ヨル様!!」
リアの声に、顔を上げた。

見ると、彼女は私を探し回ったのか、息を切らしていた。
私の方をみてホッとしたような表情を浮かべたけど、次の瞬間ギョッと目を見開いた。
私の体が血塗れだったからだろう。
「心配ない、全部返り血だ」
私はそう言いながら、地面に転がる男たちを見つめる。
殺しては……いないと思う。
ただ、全員気絶しているようで動かない。
ついカッとなってやりすぎてしまった。
「襲われたのですか!?」
リアが慌てて駆け寄ってくる。
「うん。ねぇ、これってどういうこと?」
私は襲撃者の1人の髪を掴むと、持ち上げた。
薄々感づいてはいた。
小柄な体躯、聞き覚えのある声。
それは私が今日遊んだ孤児院の子供の中の1人だった。
「子供が、武器を握るのは王都では普通のことなのか?」

「そ…れは……っ」
リアは言いにくそうに口籠もる。
「孤児は……使い捨てできるので、こういったことに使われることもあると……聞いたことがあります」
彼女は俯きながらも、はっきりと言葉にした。
私は掴んでいた男の髪を離すと、そっと横たえた。
頭の中でぐるぐると何かが渦巻いているようだった。
嫌な気分だ。
「なぜ……私が狙われたんだろう」
彼らは私が聖女であることが許せないみたいだった。
私を聖女の座から下ろそうとしていた。
「ヨル様は……ご自身が聖女になる……その意味を理解していますか？」
私が聖女になる意味、そんなものあるのだろうか？
私は答えがわからず口を閉ざす。
「ヨル様の魔法は剣、戦うための魔法です。あなたが聖女に選ばれるということは、それは神が戦いを必要としたということ」
そういうことか。

聖女はその時代に必要な魔法を与えられ、この世に生を受ける。
戦う力を持つ私を聖女に認めるということはこの時代は武力が必要な時代と認めるようなものだ。
戦争か、魔王の出現か、どの道今までの平和は望めないだろう。
「みな、戦いが怖いのです」
リアが悲しそうに俯く。
「怖いなら……戦わなくていい」
私の一言に、俯いた顔が上がる。
「孤児だろうが、平民だろうが、貴族だろうが、戦いたくないやつは戦わないでいい。代わりに私が戦う。私は強い、誰にも負けない」
だって私は魔王だから。
普通の人間とは、聖女とは、格が違うのだ。
胸を張る私を見て、リアはクスリと笑みをこぼした。
「それは、頼もしいですね聖女様」

魔王様のお見合い

私の襲撃事件の黒幕は、孤児院の院長だった。
どうやら私を聖女に相応しくないと反対する一派がいるらしく、その筆頭があの男だったというわけだ。
そもそも私があそこにいたのは子供に呼び出されたからであり、そのことを考えると孤児院の中に手を引くものがいるのは明白だった。
聖女が孤児院に慰問へ訪れたのにその件の孤児院が聖女の命を狙った。
笑えない話だ。
私は貴族たちはこのことを隠すのかと思った。
でも私の考えとは逆で王国はこのことを大々的に発表した。
『愚かな襲撃者たちは聖女の剣によって地に伏した』
どうやら王国は今回の件を聖女の名声を知らしめるための絶好の機会と捉えたようだ。
今、城下町では私の強さを讃える歌が歌われているらしい。
なんとも言えない複雑な気分だ。

そんな風に有名になってしまったしまった弊害だろうか。
私にとんでもない話が舞い込んできた。
「聖女様、ラウダ・ロゼ・ベルモンド殿下がお会いしたいとのことでございます」
「えっと……」
誰だそれ？
首を傾げる私に、リアは困ったように微笑む。
「国王様の　弟君でございます」
王の弟!?とんでもなく大物ではないか！
「一体、私になんの用なんだそいつは」
「お見合いでございます。聖女様」
……お、お見合いぃぃ!???

そんなわけで私はまたしても着飾って馬車に揺られていた。
今回は前回のような白いドレスではなく、私に似合う黒を基調としたシックなドレスだ。
いつもは下ろしている髪型も結い上げられ、上品な髪留めでまとめられている。

なんというか、ものすごい気合の入りようだ。
それだけ今回会う人物の身分が高いということなのだろう。
私は今、王城の庭園へと向かっているところだった。
しばらくすると、大きな噴水が見えてくる。
そこで馬車は止まり、扉が開かれた。
リアは先に降りると、恭しく私に手を差し出してきた。
私は差し出された手に自分の手を添えると、ゆっくりと降り立つ。
背筋が曲がっていないか、心配だな。
あの鬼のような教育係の授業を思い出し、一歩一歩きちんとした所作で歩く。
王城の中でも限られた者しか立ち入ることのできない美しい花々に囲まれた庭園に、私たちは足を踏み入れる。
そこにはテーブルと椅子が用意されており、既にお茶の用意ができていた。
椅子には1人の男が座っていた。
ブロンドの髪に青い瞳。
彼の纏う空気は、とても落ち着いていて、まるで凪いだ海のようだった。
「本日はお招きいただきありがとうございますラウダ殿下、ヨル・リデルと申します」
私はスカートの裾を持ち上げて礼をする。

作法は間違っていないと思うのだが……　チラリとリアを見ると、彼女は無言のままコクリとうなづいた。
これで間違いはなさそうだ。
「良く来た。堅苦しい挨拶は抜きにしよう、こちらに座ってくれ」
こちらの緊張とは裏腹に、ラウダ殿下は砕けた調子で言った。
促されるまま、私は席に着く。
「君の噂は聞いてるよ。なんでも、城下町で大立ち回りをしてきたとか」
そう面白そうに言うと彼はカップを手に取り紅茶を口に含んだ。
「……そんなことは…町で流れる噂は脚色されたものです」
無難に謙遜しておいて、私も彼に習って紅茶に口をつける。
味はよくわからないが、香りがとてもよい。
私の言葉を聞いた王弟殿は口元に笑みを浮かべて私を見つめた。
なんだ？　少し居心地が悪くなって視線を外す。
この人、なんか苦手かもしれない。
悪意は感じないんだが……
「単刀直入に言おう、君には私の息子リュウ・ロゼ・ベルモンドと婚約を結んでもらいたい」

ぶっ!!

私は思わず口に含んでいた紅茶を吹き出しそうになった。

お見合いって聞かされてたから、この男とするのかと思っていたぞ。

息子とかよ。

リアもそれならそうとちゃんと伝えてくれ！

というか、私とあんた息子のお見合いなら、なぜ息子がこの場にいない？

私の混乱を他所に、王弟殿下は続ける。

「君は平民の出自だが聖女、身分的には何も問題ない。息子と婚約すれば君は国王の後ろ盾を得ることができる悪い話ではないはずだ」

いや、まぁそうだけど。

なんか私が小説で得たお見合いの知識と食い違うな。

お見合いって、お互いが顔を合わせることなく、こんなに一方的に進められるものなのか……？

その後も私はお相手不在でお見合いの話を振られ続けた。

王弟殿下が何の目的でこの婚約を推し進めたいのか、私にはわからず大いに困惑した。

お話が終わった後、私はリアと一緒に庭園を歩いていた。
「聖女様はこの婚約をどうお考えで？」
リアが興味津々で聞いてくる。
どうも何もまだ直接会ったことのない相手だしな。
正直判断しようがない、というのが本音だ。
王弟殿下にここまで強引に話を進められると、権力的にも断り辛くて困る。
彼の目から悪意を感じなかったのも変な感じだ。
「王弟殿下の息子とやらは、なぜ姿を見せなかったんだ？」
私の疑問に対して、リアは難しい顔をして答えてくれた。
何でも、王弟殿下の子息は病床の身であり、ここ最近は床に伏せっていることが多いのだという。
確かに病気がちの婚約者というのは、あまり良いイメージではないかもしれない。
それで姿を見せなかったのだろうか。
「なんにせよ、直接会わんと話にならない」
今日、私が聞いたのは彼の父親の意見でしかない。
この調子では、本人に会いもせず、婚約が進められそうだ。
本人の意思も確認しないとな。

「よし！会いにいくか」
「は？」
王城のどこら辺にいるだろうか？
まぁ、寝込んでるという話だし、眺めのいい窓がある部屋だろう。
私はいくつかの部屋に当たりをつけると、術式を起動した。
術式によって形作られた翼が、私の背中で力強く羽ばたく。
私の体が浮かび上がると、地面はみるみるうちに遠くなっていく。
「ッちょ！ え゛ え゛ ぁあああ!? 聖女さまぁあ゛ あ゛ッ」
下の方で汚い声が聞こえるけど、リアじゃないだろう、彼女はあんな汚い声を出さないし。
空を飛びながら、王城の窓1つ1つを覗き込み、目的の人物を探す。
すると、1つだけ綺麗に掃除された部屋の窓から、キラキラとしたブロンド髪が見えた。
多分あれだな、父親の髪と同じ色だ。
私はその窓に向かって飛び蹴りを放った。
ガシャンッという音が響き渡る。
ガラスが粉々に砕け散る。

私はガラスの破片と共に部屋の中へと転がり込んだ。
「よぉ、お前リュウ・ロゼ・ベルモンドだな！」
「……なっ、な、な何!?」
突然部屋に乱入してきた私に、ベッドの上で本を読んでいた少年は目を白黒させている。
私はズカズカと彼のベットまで近づくと、彼の前で仁王立ちする。
「私はヨル・リデル。ラウダ王弟殿下からお前との婚約を打診されている聖女だ」
目の前の少年は、青い瞳をまん丸に見開いたまま固まっている。
「お前がお見合いの場に来ないので、こちらから出向いてやったぞ」
私は腕を組んで、堂々と言い放ってやった。
私の言葉を聞いた彼は、口をパクパクさせている。
何か言おうとしているようだが、言葉が出てこないらしい。
彼はたっぷり１０秒ほど目を白黒させていたが、ようやく落ち着いたようで、言葉を紡ぎ出した。
「そ……れ…は、どうも。僕はリュウ・ロゼ・ベルモンド、お会いできて光栄です聖女さん」
そう言って、リュウは私に右手を差し出してきた。

私はその手を取って握手をする。
「な、何事です?」
その時、彼の従者だろうか、1人の男が部屋に駆け込んできた。
そして無残にも割れた窓と、握手する私たちを見て目を丸くする。
「あー、彼女は、客人だよ。済まないが、ガラスの掃除をお願いできないかい?」
私の登場に驚いていたはずのリュウは、彼を見て落ち着きを取り戻したのか彼に指示を出した。
従者は一瞬呆気に取られたようだったが、直ぐに気を取り直すと部屋の掃除に取り掛かる。
「客人ですか。私はついにリュウ様を迎えに天使がここまで来たのかと思いました」
天使?
ああ、そういえば翼を出しっぱなしだった。
「まだ、お迎えがくるほど弱ってはないよ」
私はリュウと彼の従者の会話を聴きながら翼の術式を解除する。
確かに、彼は天使がくるのも頷けるほど、青白い顔をしている。
病床の身というのは本当のようだ。

「それで聖女さんは何を聞きに僕のところまで来たんだい？」
掃除が終わり従者が下がると、彼は本題に入った。
「お前との婚約の目的がわからなかった」
そう、ラウダ殿下はこの婚約を押し進めようとしているが、その目的がさっぱりわからない。
身分的にも私と婚約する旨味はないような気もするが……？
「目的？……あー、そうだね……」
リュウが言い淀む。
……
沈黙の後、言葉が吐き出される。
「それは……僕がもう直ぐ死ぬからだと思う」
「なに……？」
私は眉間にシワを寄せて、彼を睨みつけた。
冗談で言っているわけではないのだろう。
彼はただ、困ったように笑っているだけだった。
私がその真意を問う前に、彼が口を開いた。
「医者から、もうあと数年も生きられないだろうって言われてるんだよね」

そうなのか……

病床の身だとは聞いた、でもそんなに深刻とは思わなかった。

「父さんは、僕の死に箔をつけたいんだよ。聖女の婚約者として死ねば僕はより高い階位までいける」

「ん？階位？なんだそれは。私と婚約するとなぜ高くなる」

私は首を傾げる。

死と婚約がどうして結びつくのかわからなかった。

階位？貴族独自の考えだろうか……

「ああ、君は元々は平民だったっけ。いいかい、神様は死後僕たちを楽園へ導いてくれる。その時生前の行いによってどの階位の楽園に行くか判断するんだ」

むむ、なんだそれ、初耳だ。

私が死んだ時は楽園に連れて行かれず、生まれ変わったのだが……

どういうことだ??

「英雄である、勇者や聖女、そしてその伴侶は一番高い階位の楽園に行けるんだ。だから父さんは君との婚約をなんとしても取り付けようとすると思う」

なるほど、そういうことなのか。

楽園、本当にそんなものあるのかね……

「でも！僕は高い階位なんて行きたくないんだ！」
リュウがいきなり大きな声を出すので、私は驚いて肩を振るわせてしまった。
彼を見ると、俯いて拳を握っている。
「高い階位なんて、興味ないんだ！僕はみんなと同じ場所に行きたい……死んだ後も父さんと母さんに会いたいんだ！離れ離れになりたくないんだ!!」
あぁ、それなら私にも理解できる。
私も母親と、みんなとずっと一緒がよかった。
それを引き裂かれる気持ちが、不安が私にはわかる。

このままでは彼の父親は婚約を決定してしまうだろう。
彼を思って、彼の死に花を持たせるために。
でもその結果もたらされるのは、楽園での永遠の孤独。

とでも思ってるんだろうな。
「ふっ、はは、クはは、クハハハハハハッ！」
あまりにも愉快で、笑いが込み上げてくる。
私は大きく息を吸い込んで、腹の底から笑う。

突然大声で笑い出した私をリュウがキョトンとした顔で見ている。
その様子も可笑しくてまた吹き出してしまう。
「クハハハッ！そうだな改めて自己紹介しようか、婚約者殿！私の名前はヨル・ヴァ・リデル。聖女などではなく予言されし悪魔の子!!」
貴族の姓は絶対名乗るな、そう母親は言った。
聖女としての身分が私を守ってくれるとも。
でも今だけはそれを忘れた。
この真実、愉快な勘違いは、彼に必要なものだったから。
「お前の婚約者は聖女などではなく、魔王の生まれ変わりだ！だから……だから、もう、そんな寂しそうな顔をするな。大丈夫、お前はみんなと同じ場所に行けるから……」
私はリュウの頭を撫でてやる、母親がそうしてくれたように。
彼はしばらくされるがままになっていたが、やがてその頬には涙が流れていた。
「君は優しい嘘をつく人だね」
彼は涙を流しながら微笑む。
「嘘じゃない」
彼の言葉にムッとする。

私の決死の告白を嘘呼ばわりしないで欲しい。
「いや、君は聖女だよ。そうじゃないと父さんが納得してくれないだろ、魔王様」
「……クク、そうだな」
私たちは顔を見合わせてニヤリと笑った。

正義の執行者

勇者と戦って、無事でいられるものは少ない。
聖剣に選ばれし人間。
その力は絶大だった。
剣を一振りすれば、術式は砕け散り魔族は息絶えた。
あまりにも無慈悲すぎるその力に先代の魔王は敗れた。
　私はそんな勇者を倒すべく設計された。
「灰にしろ」
私の纏う黒炎が勇者に襲い掛かる。
勇者は聖剣で切り裂くが、その度に私の放った黒炎は再生していく。
黒炎は術式を切り裂く聖剣の対抗策として開発された術式だった。
焼き尽くす、最強の攻撃にして、最大の防御。
この再生する炎の鎧を突破できない限り奴の刃は私に届かない。
「面倒臭いね」
勇者が呟いた。

そして次の瞬間、勇者の姿が消えた。
「ッ!?」
一瞬で距離を詰められた。
黄金が閃き、黒炎が散っていく。
痛覚が反応する。
聖剣は黒炎を貫き、私まで届いていた。
それはありえないことだった。
私の頭には今までの勇者の戦闘記録が全て入っている。
この炎の鎧は勇者の力では絶対に貫けないはずだった。
今までの戦闘は本気ではなかった……いや、ちがう。
勇者は成長しているのだ、今、この瞬間。
「クッ、ク、ククク、クハハハハハッ」
笑いがこみ上げてくる。
自分が対峙している存在、その余りにも理不尽すぎる強さに。
いいぞ、勇者、そうでなくては。
約束された勝利などつまらない、だから、もっと抗え、もっと戦え。
その日、私たちは持てる全てをぶつけ合った。

しかし、決着はつかなかった。

◇◇◇◇

私が拒否しなかったため、リュウと私の婚約は成立してしまった。
それ自体は、まぁ別にいい。
どうせ拒否したところで、この婚約は強引に推し進められていた可能性が高い。
私は自分の正体を明かしてまで、リュウを助けたかった。
あの時、私と同じように苦しんでいる彼に同情してしまったからだ。
だから、婚約自体に不満はないのだ……
「聖女様には夜会に出席して貰わなければなりません。今までは年齢を理由に断っていましたが、今回の婚約を期に招待状が殺到しており……断ることが難しくなってきています」
……不満はないのだが、こうなるとは思わなかった。
「社交界デビューとなりますので、気合をいれて準備を整えなければなりません」

また着飾るのか私!?
しかも夜会となればダンスもあるかもしれない。
ダンス…礼儀作法……今からでもあの授業を受けなければいけないと考えるだけで冷や汗が出てくる。
あの授業は地獄だった……
あの教育係の女の罵倒……振るわれる教鞭……
思い出したくもない。
私が遠い目をしていると、部屋の扉がノックされた。
リアが開けた扉の向こうにいたのは、あの教育係の鬼女だった。
うえぇ!?今からやるの?
本当に……? あの……勘弁して欲しいというか……
い、嫌だ!逃げ……
ぬわあああああああぁぁぁぁぁっ!!!
その日から夜会当日まで、私はみっちり、こってり絞られた。

夜会は王城の近くの私邸で行われるようだ。

会場は立食形式で、音楽に合わせて踊ることも可能らしい。
私の婚約者であるリュウは私より先に会場で待っているようだ。
幸いなことに今日の体調を加味してリュウはダンスを辞退するらしい。
助かる！
婚約者である、彼がダンスを辞退するのであれば私もダンスを断る口実ができる。
これで私の下手くそなダンスを披露しなくて済む。
だいぶ練習はしたが、人前で踊れる気はまったくしない。
私が会場に足を踏み入れる頃にはもうだいぶ人が集まっていた。
私が顔をみせると貴族たちの視線が一斉にこちらを向くのがわかる。
うっ、視線が痛い……今回の夜会の参加者の中では私は特に有名人なので注目するのはわかるが……こうも露骨に注目されると気分はよくないな。
私は会場の端に座るリュウを見つけると、そそくさとそちらに移動した。
「今晩は、リュウ」
「やぁ今晩は、随分人気者だねヨル」
リュウは相変わらず青い顔色だったけど、笑顔を見せてくれた。
前あった時の楽そうな服装ではなく、今日は王族らしくきっちりと正装をしている。
私に合わせているのだろうか、黒を基調とした衣装だ。

私を手招きして、自分がいる席の隣へ案内してくれた。
「主催者が気を利かせてくれてね、君の分の椅子も用意してくれたんだ」
他のみんなが立食なのに、私たち2人だけ椅子に座るのは変な感じだ。
まぁ、リュウの体調を踏まえると仕方のない話なのだけど……
それからしばらくすると、音楽が演奏され始め、静かに夜会が始まった。
リュウが動けないため、こちらから挨拶回りに行くことはできない。
私はただ黙々と味もわからない料理を食べ、貴族たちが挨拶に来たら頭を下げ、授業で習った通りに挨拶を返す。
夜会って退屈だな。
「あちらにいるのは、西の辺境伯のご子息のダリウス様だ。その左にいるのは、東の侯爵令嬢のアリア様だね」
リュウが小声で貴族について私に教えてくれる。
私は貴族の人間なんぞに興味はないのだが……
でもすることもないので、彼の話に相槌を打ちながら料理を口に入れる。
「あ！見てヨル。今入ってきたのは勇者だよ！」
「んぶふぅぅぅッッ！」
思わず口に含んでいた食べ物を吹き出した。

ゲホゴホッ！　咳が止まらない。
ゆ、ゆ、ゆゆ、勇、者だとぉぉぉぉ!!??
私はリュウが指してた方向を食い入るように見つめる。
そこには私と同じくらいの、小さな男の子が立っていた。
私の知っている、金髪の、自信に満ち溢れた青年ではない。
髪は茶髪、猫背気味で、自信のなさそうな表情、まるで覇気が感じられない。
あの男が本当に勇者なのか……？
でも彼の腰には、確かにあの聖剣が携えられている……
聖女と同じく、勇者も代替わりしているということか。
現勇者には失礼だが……私は、ガッカリしてしまった。
何故だろうか、私の知る勇者がまだいる気がしていたのだ。
そういえば魔王だった頃の私が死んでから何年の月日が経過したのか、私は知らなかった。
調べてすらいなかった。
「どうしたの？」
急に動きを止めて固まってしまった私にリュウが話しかけてくる。
「いや……今代の勇者はまだ幼いんだな」

私は誤魔化すように返事をした。
なんだかクラクラしてきた。
私はなんとなく魔王だった時と今はそんなに変わらないと思っていた。
でも時代は、私を置いてきぼりにして確かに進んでいた。
少し……1人になりたい気分だった。
「ちょっと、涼んでくる」
私はリュウにそう伝えると、バルコニーに足を運ぶ。
外はひんやりとした空気に包まれていた。
夜風にあたり、頭が冷えていく……

……？

室内にいた時は料理の香りで気がつかなかったけど、何か変な匂いがする。
なんだか……懐かしい匂い……
前にも嗅いだような……
突然、背後から尋常ではない悲鳴が響いた。
振り返る、ダンスを踊る人々、その中央の2人の片方の首がない。

血飛沫が上がり、その血は周囲の人々に降りかかる。
事態に気づいた人々が、逃げ惑うのが見える。
首のない死体と踊る男、その頭には捻じくれた角が生えていた。
それを認識した瞬間、攻撃術式を、起動する。
起動、したつもりだった。
「あれ？」
気づけば私の体は宙を舞っていた。
背中から料理の並ぶテーブルに叩きつけられる。
肺の中の息が全て吐き出され、視界が明滅し、意識が遠のく。
なんだ？何が起こった。
攻撃……された？
フラつく身体を無理やり起こして顔を上げると、私のいたバルコニーから魔族が会場に入ってくるのが見えた。
いや、私のいたバルコニーだけじゃない。
外に通じる全ての出口から魔族が現れる。
逃げ道が、塞がれた。
「同胞たちのために……今なお苦しむ家族のために……」

首なし死体と踊る男がまるで歌うように宣言する。
「死ね……!!」
術式が一斉に起動される気配がする。
「ッッッ!!」
今私の保有している、ありったけの防御術式を起動し術式の相殺を試みる。
術式同士がぶつかり合い、魔力の残滓が散っていく。
衝撃で窓ガラスが割れ、建物全体が揺れる。
「ぐっ」
なんとか……防げた。
でも防御しているだけでは事態は変わらない。
私の防御術式も直ぐに尽きるだろう。
攻撃に、転じなくては。
「勇者ッッ!!　防御は私がやる、攻撃を頼む!」
私は叫んだ。
私が防御で精一杯でも、ここには勇者がいる。
私ですら手を焼いた、あの聖剣に選ばれし勇者が。
でも……　返事が帰ってこない。

勇者は聖剣を抜き、自分の使命を果たそうとしていた。
しかし、その顔には涙が浮かび、足はみっともなく震えていた。
私は、勘違いをしていた。
勇者とは超人的な力と精神力を持った人外の存在だと思っていた。
だって、私と戦った勇者はそうだったから……
でも、ここにいる勇者は聖剣に選ばれただけの、まだ覚悟も決まっていない幼い男の子だった。
私は、それを理解できていなかった。
「……あっ」
バキンッ！
私の防御術式が音を立てて砕ける。
会場にいる人々の絶望が伝わってくる。
もう、私たちと攻撃を隔てる壁はない。
やばい……
攻撃術式を起動する。
何人、倒せるだろうか？
この会場にいる人々は何人、助かるだろうか？

息が苦しい、うまく呼吸ができない……

「今代の聖女は、勇敢だな」

声が、聞こえた。

私の知っている声、でも私が知っているものより嗄れた声。

「それに比べてお前は、情けない。僕が鍛えているというのに」

黄金が閃き、術式が全て粉々になる。

勇者の傍に男が立っていた。

年老いて曲がった背骨、白髪交じりの髪、シワだらけの顔。

でも、その青い瞳に浮かぶ憎らしいほどの強い正義は、なにも変わっていなかった。

「そろそろ安心して引退させて欲しいのだけどね……」

私の知っている、あの勇者がそこに立っていた。

不信感

「何故、魔族は負けている?」
私は幹部の一人であるザハに尋ねた。
魔王城にある私の私室、戦況の映る水晶玉の前で私たちはこの戦の情勢を見定めていた。
映像の中では、魔族と人間が激しい戦闘を繰り広げている。
一見すると、魔族が優勢のように見える。
人間の損失は圧倒的だ。
戦場には人間の死体が折り重なり、山を築いている。
だが、それでも……勝っているのは、人間の方なのだ。
「負けているなどと……
「言い訳はいらない。私はただ、現状に疑問を抱いている」
ザハの言葉に被せるように私は言い放つ。
人間は性能面において、魔族に劣る生き物だ。
魔族よりも圧倒的に少ない潜在魔力。

その瞳は魔力を知覚することもできない。
脆弱な肉体、寿命も魔族の半分もない。
普通に考えれば、負けるはずのない戦い……だが押されているのはこっちだ。
勇者と聖女の力は圧倒的だが、それだけで魔族の攻勢を押しとどめるほどではないはずだ。
「単純に魔族と人間では数が違いますからな。やつらは1人1人で見れば魔族に劣りますが、その圧倒的な数で力の差を埋めているのです」
私の疑問に、ザハが答える。
確かに、人間の軍隊は多数の死傷者が出ているにも関わらず一向にその数が減らない。
「なぜこうも人数差がある、魔族と人間の出産能力にそこまで差異はないと記憶しているが？」
私の問いにザハは困った顔をする。
「そこら辺の知識は魔王様の頭にはインプットされてませんからねぇ……」
またそれか。
私の頭には魔王として戦うべく、数多の知識がインプットされている。
だが、それらのほとんどが戦闘に関する知識であり、それ以外の知識は穴だらけだっ

た。

私はため息をつく。

「いいですか、魔王様。我々魔族はその長い生涯の中でたった1人しかつがいを選びません。そのつがいは星々の導きにより定められた相手であり、我々はつがい以外とは子を儲けることができないのです。対して人間は成人した男女であれば誰とでも子を儲けることができます。この差が我々の劣勢の原因ですよ」

なるほど。

それで魔族の繁殖能力は、人間と比べて低いわけか。

「我々魔族はつがいをとても大切にします。ですので、つがいを捕虜にされた若い魔族が無謀な特攻をすることも珍しくありません」

私は唸る。

問題点はわかった、だがこの問題点は魔族という生物である限り解決は難しいように思える。

「つがいを失った者は一旦冷静になって相談してくれればよいのですが……」

そう言っていたザハが、人間に捕らえられたつがいを追って姿を消したのは、それからしばらく経ってからのことだった。

◊◊◊◊

勇者が輝く聖剣を振るう。
それに合わせて私も攻撃術式を起動する。
黄金の剣と術式の剣が踊り、敵を蹴散らす。
勇者の剣は、あの頃と何も変わっていなかった。
憎らしいほどの正確で迷いのない太刀筋。
こいつの癖は知っている。
勇者の動きに合わせ、その隙を埋めるように剣を飛ばす。
私たちの連携に魔族は対応できず、次々に倒れていく。
「あとは君だけだね」
ついに1人の魔族をのぞき、全ての魔族は倒れ伏した。
首無し死体と踊っていた魔族。
もちろん攻撃していなかったわけではない。
だがヤツは私の剣は防御術式で防ぎ、勇者の聖剣からはヒラリと身をかわした。

この魔族はおそらく、他の魔族とは格が違う。
その身のこなしは戦い慣れている者のソレだ。
といっても……勇者にはまるで歯が立たないだろうけど。
「もう大丈夫そうだから、そいつは任せる」
私は勇者にそう伝えると魔族とは反対方向に歩き出した。
勇者はこちらを一瞥すると、
「そうか、ではそちらは任せた」
とだけ言って、再び魔族の方へ向き直った。
やはり、勇者も違和感に気づいていたらしい。
例え大人数だろうと、魔族がこの夜会を襲撃するのはおかしい。
この夜会には、勇者と聖女が参加しているのだ。
どんな魔族が来ようが勝てるわけがない。
こんな大掛かりな自殺行為を魔族が仕掛けるとは考えにくい。
なら、なぜ？
おそらく、この襲撃はおとりだ、勇者と聖女を一つの場所に留めておくための。
魔族の本当の目的は他にあるはずだ。
バルコニーから身を乗り出し、匂いを探る。

どうやら……こっちの方角で間違いなさそうだ。
私はそのまま、バルコニーの手すりを飛び越え、夜の闇へと駆け出す。
匂いは、小さな教会まで続いていた。
教会の扉がこじ開けられ、無残に転がっているのが見える。
中には、誰もいない、でも微かに気配がする。
詳しく探ると床に椅子を移動した跡が残っていた。
椅子の下の床に、違和感を感じる。
……隠し通路？
持ち上げると、そこには地下への階段があった。
気配はこの先からだ。
なぜ教会に隠された階段があるのか、その疑問は今は一旦放っておく。
私は意を決して、暗い闇の中へと降りていった。
教会の地下は、真っ暗だ。
明かりも何も無い、完全な暗闇が広がっている。
でも、私の鼻は、その奥に存在する何かを確かに捉えていた。
ゆっくりと、歩みを進める。
少し進むと、通路の先に瞬く明かりが見えてきた。

微かに、話し声も聞こえる。
見えてきたその光に向かって進んでいく。
そして……広い空間に出た。
そこは、複数の魔族たちがいた。
魔族たちは抱き合い、笑い合っていた、涙を流している者さえいる。
私の一番近くにいる魔族。
それは、見覚えのある魔族だった。
「……ザハ……？」
私の声にその魔族が顔を上げる。
それは、まさしく魔王軍幹部の1人にして魔王型生物兵器【アデル】の設計者、ザハだった。
「ッッ！聖女!!」
ザハが叫ぶと同時に、その背後にいた魔族たちも一斉にこちらを振り返る。
一気に殺気立つ魔族たち。
私は即座に戦闘態勢を取る。
だが……攻撃が来ない。
魔族たちは後ろのものを庇うように防御術式を展開している。

よく見ると、後ろにいる魔族たちは皆痩せ細り、酷い身なりをしている。
目が慣れてきて、ようやく私にもこの場所の全貌が見えてきた。
ここは牢獄だった。
そうか、魔族たちの本当の目的は……
「つがい……か」
彼らは取り戻しにきたのだ、星々の導きにより定められた片割れを。
ザハに目を向ける。
必死の形相、後ろに庇う魔族の女性の手をきつく、きつく握っている。
私が魔王だった時、彼のこんな顔は見たことがなかった。
魔族とは、つがいを守る時こんな表情をするのだな。
私は、こんな魔族を、攻撃するのか……？
「……」
私は腕を下ろす。
それを見たザハが、信じられないものを見るような顔をした。
「つがいを取り戻したのなら、王都を去れ。人間のいない地で暮らすがよい」
私の言葉に魔族たちはポカンとした様子で私を見つめる。
「我々を見逃すというのか？」

そんなバカな、と言わんばかりの口調で魔族は問う。
私はその問いかけに黙って頷いた。
今の私にこの者たちを攻撃することは、できなかった。
魔族たちは半信半疑で私を見ていたが、私が動かないとわかると、出口へ歩き出した。
「ザハ……」
私はかつての幹部を呼び止める。
「お前のつがいが見つかって、よかったよ」
「お前は何者だ？何故私の名前を知っている……聖女では、ないのか？」
私は、お前の創造した生物兵器、その成れの果てだよ……
私は何も答えず、ただ首を横に振る。
それを見た彼は何も言わずに、魔族たちと去っていった。
私は暗い牢獄の中、ひとりになった。
唯一の光源である松明の燃えるパチパチとした音だけが辺りを支配する。
私は壁際に座り込む。
しばらくすると、コツ、コツと足音が聞こえてきた。
現れたのは、勇者だった。
勇者は、無言のまま、私の隣に立つ。

「魔族を逃したか……それはその高潔すぎる正義のためか？それともその幼さ故の甘さのせいか？」
私はその問いには答えずに、問いに問いで返す。
「人間は、魔族を捕らえて何をしている？」
存在を隠された、地下の牢獄。
牢獄の中に置かれた、明らかに拷問器具とは違う何かの装置。
痩せ細った魔族たち。
私の許容できない、何かが行われていたことは明らかだった。
「さぁな、僕は知らない」
……嘘だ。
いつも勇者の青い瞳に浮かぶ憎らしいほどの強い正義が、揺らいでいた。

人間か、魔族か

窓から差し込む光が、室内を照らす。
ここは、王城にある一室。
ベッドに横たわる婚約者、私はそのそばに置いてある椅子に腰掛けていた。
リュウと婚約してから、私はこうやって折を見ては彼のもとを訪れていた。
生憎今日リュウは眠っており、私は1人で暇な時間を持て余している。
彼が眠っていた場合、私はたいていは本を読んで時間を過ごす。
でも今日はやること、考えるべきことがたくさんあった。
私が魔族を見逃したあの日、勇者はそのことを咎めはしなかった。
彼はただ、魔族の捕虜が脱走したという事実だけを報告した。
勇者も何か思うところがあったのかもしれない。
王都の騎士団が魔族たちを探すため派遣されるだろう。
私はそれを止めることはできない。
私は、自分の身の振り方を迷っていた……
もう、元魔王として人間に牙を剥くことはできない。

そうするには私は人間として大切なものをつくりすぎた。
でも、聖女として魔族と敵対し、彼らを滅ぼすことも……嫌だった。
私にとって、魔族たちは、かつて共に戦った仲間なのだから。
魔族たちにも家族がいる。
彼らは人間とは相容れない存在なのかもしれない、それでも私は彼らの幸せを願わずにはいられなかった。
私はこれからどうしたらいいのだろうか。
私は魔族も人間も、どちらも敵とは思えず、宙ぶらりんの状態になっていた。
ただ、このまま魔族の味方もするのであれば、私は人間側の絶対正義、勇者と敵対することになるだろう。
今の私では勇者に勝てない。
それが私の出した結論だ。
今の私の肉体は、脆弱な人間のものだ。
おまけに肝心の術式も、魔王時代の五割ほどしか再現できていなかった。
魔王の使用していた術式は、魔王専用にカスタマイズされている。
魔王の身体に合うように調整され、強靭な肉体から繰り出されることを想定して作られているのだ。

何も考えずにこの体でその術式を起動すれば、反動で傷を負うことになるだろう。
私は理由もなく、基本的な剣と防御の術式だけを使っているわけではなかった。
それら二つは高い汎用性を持ち、かつ人間の身体でも問題なく使用できる優秀な術式なのだ。
私の最高術式の黒炎にしても魔王の体にフィットするように作られた術式の鎧だ。
今の私の身体は小さく、４本の腕も、尻尾もない。
私の身体用に術式を書き換えねば、使えたものではない。
だがそこで問題になってくるのが魔力の見えない、人間の目だ。
私は何も見えない、手探りの状態で術式を修正しなければいけなかった。
今までは、時間をかけて修正していけばいいと思っていた。
どの道、不完全でも私に勝てるものなどいないと考えていた。
だが勇者と敵対する可能性があるのであれば話は別だ。
早急に何か手を打たなければ……
今のままでは、私は勇者に傷一つつけることもできずに敗北するだろう。
私は、かつての魔王の力を取り戻さなければならない。
人間側に付くにしても、魔族側に付くにしても、今の私では選択肢がない。
「……はぁ……」

口からため息が出てくる。
村で暮らしていた頃は、こんな悩みを抱えず気楽に生きていたというのに。
随分と難しい立場に身を置いてしまったものだ。
「どうしたの、ため息なんて君らしくも無い」
いつの間にか目を覚ましていたのだろうか。
リュウの青い瞳が私を捕らえる。
私は慌てて首を振る。
「起こしてしまったか。少しな……自分の弱さにうんざりしていた所だ」
私は肩をすくめて答える。
「へぇ、僕は君より強い人なんて見たことないけどね」
こいつ……
あの夜会の会場で勇者の戦う姿を見ただろうに。
それでも私が一番強いと言うのか？
私はなんとも言えず、リュウを見つめ返す。
「あの会場で、君はみんなを助けるため誰よりも速く動いた。ヨルは救える人間に手を伸ばさずにはいられないんだね。その優しさは君の強さだと思う」
それ、は……優しさとは違う。

私はただ、自分のせいで罪のない誰かが傷つくのが嫌なだけ。
父親のように、私が原因で人が死ぬのが許せないだけだ。
頭の中で言い訳を並べる、でもリュウの目は私を真っ直ぐ見つめている。
私を信じきった目だ。
……なんだか馬鹿らしくなってきた。
目の前の少年がこんなにも私のことを信じてくれているのだから、私も少しは自分の力を信じてもいいのかもしれない。
「私が強い？……ククク、そんなこと当たり前だろ。私を、誰だと思っている！」
私は不敵に笑ってみせる。
少し……元気がでた。

屋敷に帰ると、私の養父であるロレンスがいた。
彼は私が帰ってくるのを待っていたようだ。
「ヨル様、お待ちしておりました。大事なお話があるのですがよろしいでしょうか？」
うええ……
私は机の上に置かれた書類の束を見て心底ウンザリとした気持ちになる。

いったい何の話だろうか。

「ヨル様はそろそろ１０歳になります。王都の学院へ通う準備をしなければなりません」

「学院、ですか？」

私は首を傾げる。

王都の学院というのは、貴族や優秀な人材のための教育機関だ。

貴族の子女や、才能のある平民が通い、国の中枢を担うような人物を育てる場所。

私はそんなところに通わなければいけないのだろうか。

正直面倒くさい。

教育なら今まで散々やってきただろう、これ以上私の頭に何を詰め込むというのだ……

「貴族のご子息や勇者様も学院に通うようです。在学中にご交友を持たれるのがよろしいかと」

勇者？

勇者はそんな年齢じゃ……ああ、あの震えていた今代の勇者のガキのほうか。

私と同じくらいの年齢のように見えたが、同い年だったとは。

「つまり学院で交友関係を広めてこいという事ですか」

私の問いに、ロレンスは静かにうなずく。
「聖女として、味方を増やさなければなりません」
聖女として……か。
なぜ今更そんなことを強調するんだ？
別に私と敵対する存在がいるわけでもないのに。
「実は、問題が起こっているのです。本題はこちらの話でして……」
ロレンスの言葉に私は眉をひそめる。
問題？一体何のことだ。
話ぶりからして結構深刻な問題みたいだけど。
まさか、また魔族が何か問題を起こしたとか言わないだろうな。
「ヨル様の他に聖女が現れました」
「へ……？」
今何と言った？
私の他に聖女？
聖女って１人っきりじゃないの？
「それも２人も」
なん……だと!?

入学式

「魔王、あなたには……愛する人はいないのですか？」
そう聖女に尋ねられたのは、いつのことだっただろうか。
戦場だったことは確かだ。
聖女の使う光の壁は鉄壁で、私の術式でさえも通さなかった。
勇者が幹部と戦う中、加勢しようとする私の前に聖女はいつも立ち塞がった。
聖女に私を傷つける術はない、だが私も聖女の守りを突破できなかった。
膠着状態が続く中、彼女はよく私に話しかけてきた。
ここが戦場だと理解していないのか、よほど能天気なのか。
今思うと、彼女は創られた魔王、魔王型生物兵器【アデル】という生き物を理解しようとしていたのだと思う。
「なんだそれは？理解できないな」
私はいつも彼女が語ることを理解できなかった。
愛とか夢とか希望とか。
戦いに必要ないものばかり語りかけてきた。

その度に私は冷たく突き放したのだが、それでも聖女はめげなかった。
彼女の語る理解不能なものが、私の中にもあることを確信しているようだった。
私と戦った聖女は、変なやつだった。
今の私を彼女が見たら何というだろうか？
今の私は彼女の話をちゃんと理解できるだろうか？
もう、ここにはいない彼女のことを思う……

◇◇◇◇

戦いを司る聖女は戦の時代の幕開けを意味する。
私を聖女とは認めたくない人々が存在することはよくわかっていた。
私に敵が多いことも、重々承知している。
でも、このような形で私の地位を脅かしにくるとは考えてもいなかった。
私以外の聖女の発見。
私を聖女の座から引きずり下ろしたいのなら、本物の聖女を作りだし私を偽物にして

しまえばいいという訳だ。
聖女は先代が亡くなると、この地に生を授かる。
聖女は一代に必ず1人だ、2人や3人もいるはずがない。
私も含めた3人の聖女の中で本物は1人しかいない。
……
そこまで考えて、気が付く。
多分、私って聖女じゃないよね？
私の膨大な魔力も、未知の魔法も、全て前世の魔王による恩恵だ。
そこに聖女要素は微塵もない。
聖女だと持ち上げられていい気分になっていたけど、これは結構やばいのでは？
私が聖女ではないのなら、早急に本物に地位を返上した方がよいだろう。
だが私の他に聖女に名乗りをあげたのは2人。
そう、2人だ。
正直……どっちが本物か皆目見当もつかない。
ロレンスが言うには、1人は同級生、もう1人は上級生になるらしい。
学園に通えば、会う機会もあるだろう。
直接会って、見極めるか……

私はとりあえず、学院に行くことを了承した。

王国立中央学院、学院と呼ばれるこの教育機関は、国内で最も優れた者が集まる場所と言われている。
王国内の貴族はもちろん、他国からも優秀な人間が集まっている。
そして平民であっても、才あるものはこの学院に入ることができる。
王族だけでなく、歴代の勇者や聖女もここを卒業したそうだ。
学院には3つの学部がある。
一つ目は、法律や領地の経営を学ぶ法学科。
二つ目の、騎士になるべく剣術や戦術を学ぶ騎士科。
三つめが、魔力の研究を行い、魔法を学ぶ魔術科。
私が入学するのは魔術科だ。
剣術に興味はないし、法学科は貴族のお坊ちゃま嬢ちゃん達の巣窟なのでパス。
まぁ、魔法などという術式の劣化品にも興味はないのだが……
法律や剣術よりかはマシという、消去法で魔術科に決めた。

それで今日は入学式のために学院まで足を運んだのだが……
なんか校門で仁王立ちする上級生の女がいる。
彼女は新入生位の女子手当たり次第に声をかけていた。
何だあの女？
不審に思いながらも、目を合わせないようにして彼女の横を通り過ぎる。
「ちょっと！あなた」
当たり前のように私も呼び止められた。
めんどくさい。
「……はい。何でしょうか？」
私は警戒しつつ返事をする。
彼女は偉そうに胸を張ると、こう言った。
「上級生に挨拶しないとは、礼儀がなってないのではなくて!!　あなた、お名前は？」
本格的にめんどくさ！
「申し訳ありません。私、えっと……ヨ、ルサ・ハーミットと申します」
なにか嫌な予感がするので、適当に偽名をでっちあげる。
女は私の方をジイッとにらんでくる。

なんか他の生徒より拘束が長いのだが、私変なことしたか？
「ふぅん、そう。私はノールよ。今後は先輩をきちんと敬うように」
「はあ……」
意味不明な女は、私に釘を刺すと去って行った。
いったい何だったんだ。
私の知らない礼儀作法か何かだろうか？
なんだかよくわからないけど、どうやら助かったようだ。
今後面倒なことにならなければいいけど……　私は心の中でため息をつく。
後ろで謎の上級生があげる声を聴きながら、私は入学式の会場へと足を進めた。

学院に入るのには一悶着あったが、入学式自体は粛々と進んだ。
私は学院長の長い話を聞き流し、退屈な来賓の祝辞も右から左へと聞き流す。
年寄りの世間話には興味がない。
そうやって聞き流していると新入生代表の挨拶が始まった。
新入生代表の挨拶は各科の成績優秀者が選ばれる。
まぁ、建前ではそういうことになっている。

実際は、代表の選出には権力が多分に関わってくる。
私は、今挨拶している法学科の代表、ラルク・ロゼ・ローデンヴァルトと名乗った少年に目をやる。
彼はこの王国の第四王子だ。
まるで温室で育ったかのような傷ひとつない肌。
自分の思い通りに事が進まないことなど、考えたこともないような甘ったれた顔。
いかにもボンクラな印象を受ける。
あれで成績優秀はないだろう。
第四王子という地位が、彼をあそこに立たせているのだろう。
かくいう私も聖女という理由だけで魔術科の代表に指名されていた。
おそらく、騎士科は勇者のガキが指名されているのだろう。
王子、勇者、聖女が仲良く代表というわけだ。
まぁ、私は辞退したんだけど。
私が辞退したことでちゃんとした成績優秀者が挨拶してくれることだろう。
王子のかったるい挨拶が終わり、魔術科の代表が呼ばれる。
「魔術科代表、ミリ・ラズ・ルーナ」
……

「……？」
名前は呼ばれたが、誰も壇上に上がらない。
「魔術科代表、ミリ・ラズ・ルーナ」
もう一度名前を呼ばれる。
でもそれに応えるものはいなかった。
何かトラブルだろうか？
教師陣が何やら慌ただしく動き回っている。
キョロキョロと辺りを見渡して探ると、私の斜め後ろの席が空席だ。
どうやら魔術科代表様は入学式をすっぽかしたらしい。
たいした度胸だ。
「申し訳ありません、少々問題が起こりまして……先に騎士科の代表挨拶を行います」
司会の教師は、困り果てた様子でそう告げた。
騎士科ということは今代の勇者かな。
あのガキがどんな挨拶をするか楽しみだ。
「騎士科代表、ルーカス・リカルド」
「……え？」
勇者の名前じゃない。

聞き覚えのある名前だった。
こんなところで聞くとは思っていなかった名前。
少年が壇上に上がる。
私の記憶にある、でも記憶よりもずっと大きくなったその姿。
『僕、王都に行くよ、絶対。ヨルに会いに行くから』
私は今でも彼の言葉を覚えている。
私が彼と最後に会った時の言葉だ。
私は呆然と彼を見つめる。
彼は、壇上から真っ直ぐにこちらを見つめていた。
私の幼馴染みのルーカスがそこに立っていた。
約束は、果たされた。
何も期待していなかった学院生活……それが急に楽しみになってくる。
私の胸元で、ペンダントが揺れた。

３人の聖女

魔術科代表の生徒は結局入学式が終わるまで姿を見せなかった。
体調不良だろうか？
教師陣の慌てぶりを考えるに、連絡がなかったようだが……
「ヨル、久しぶり！」
空席だった椅子を見つめていたら声をかけられた。
振り返ると、懐かしい顔がそこにあった。
ルーカスか……というより、こいつ背高くないか？
私もそれなりには伸びたはずなのだが、こいつと比べると虚しくなるな。
「私の母親は元気にしているか？」
「アイシャさん？…は元気にしているけど……僕に再会して第一声がそれ!?」
??　そうだが、私は何か変なこと言ったのだろうか。
ルーカスがなぜか暗い顔で落ち込んでいる。
道のりは長そうだとかブツブツ愚痴っているが何の話だ？
まぁいい、今日は入学式だけなので特に用事はない。

私はせっかくなので久しぶりに再会したルーカスと一緒に帰ることにした。
「しかし、騎士科代表がお前とはな。勇者はどうした？」
「あぁ、何だか辞退したみたいだよ」
ほぉ、勇者のガキは私と同じように代表を辞退していたのか、どうりで。
しかし代表者の３分の２が辞退とは教師たちも大変だな。
それで選ばれたのがボンクラの王子に、姿を見せない女、そして平民出身の騎士の卵とは錚々たる顔ぶれではないか！
なかなか愉快な学年だな。
私は、内心ほくそ笑む。
そうこうしているうちに、私たちは学院の門の前に着いた。
「あのー、ヨルもしこの後予定がないのならお茶でも……」
ガタンッ！
ん？
「何の音だ？」
私はなにやら喋っているルーカスを遮り、音のする方を見る。
校門の裏手にひっそりと配置された用具入れ、音はそこからした。
ガタッガタンッ！

私たちが見つめる中、用具入れが跳ねる。
何だ……あれ？
用具入れって生き物だっけ？
何やら中からか細い悲鳴が聞こえる。
誰か入っているのだろうか。
「わ！大変だ。閉じ込められちゃったのかな」
ルーカスが用具入れの扉を開けようとするが、どうにも開きそうもない。
ガチャガチャと音を立てるだけだ、鍵が閉まっている。
「壊すか？」
私は術式の剣を出し、狙いを定める。
「ちょっ！ちょっと待った！中に人、人がいるから!!」
ルーカスが慌てて止める。
「今！開けるから、その剣はいらない」
ルーカスはそう言うと、力を込める。
バキッと何かが折れる音と共に扉が開いた。
あーあー、壊したなこいつ、まぁ私も壊すつもりだったんだけど。
箒と共に小柄な少女が転がり出てくる。

べちゃっと地面に倒れる少女、その長い髪がふわりと舞った。
陽の光を浴びて輝く美しい銀糸のような白銀の髪。
その美しい銀髪は私にかつての聖女を思い出させた。
何者だこいつ。
「あのー、大丈夫？」
私たちは心配して覗き込む。
すると、彼女は勢いよく起き上がった。
「はい！大丈夫です、ミリ・ラズ・ルーナです。髪をお褒めいただいてありがとうございます。出していただいて感謝です」
捲し立てるようにそう話し出した彼女に困惑する。
誰も髪など褒めていないのだが……
それより、今なんと名乗った。
ミリ・ラズ・ルーナ、魔術科代表の生徒ではないか。
こんなところで何やっているんだ？
入学式はもう終わったぞ。
「え!!入学式はもう終わっちゃったんですか？そ、そんな……」
彼女がうな垂れる。

何だか小動物っぽいというか、庇護欲を誘う奴だ。
「ちょっと！何勝手に開けていますの」
その時、後ろから怒声が響く。
見ると、今朝校門前で踏ん反り返っていた女が立っていた。
彼女は私を見ると怒りの形相になる。
何故私が睨まれる？　開けたのは隣に立っているルーカスなのだが……
ミリはぴいぃと悲鳴を上げると用具入れに引っ込んだ。
「ヨルサ・ハーミットさんですね？なぜその扉を開けたのです」
高圧的な態度の女に私は眉根を寄せた。
私が反論しようとした時、ルーカスが私を庇うように前に出た。
「扉を開けたのは僕だ。大体君は人違いしているよ、彼女はヨル、ヨル・リデルだよ」
あ、まずい。
私がせっかく偽名を名乗ったのに訂正されてしまった。
「ヨ、ヨ、ヨル・リデルですってぇぇぇぇ!!」
女が金切り声を上げる。
女のいきなりの奇行にルーカスは驚いたのか一歩後ずさった。
本格的にやばい雰囲気がする。

「見つけましたわよ！名前を偽るとはいい度胸じゃない偽聖女！」
偽聖女だと……なるほど大体経緯がわかった。
今の私を偽物と断定できる人物はそんなにいない。
母親か、リュウか、そうでないなら……
「聖女はあなた、ヨル・リデルでもなくミリ・ラズ・ルーナでもない。私ノール・メル・ウィンディこそが！本当の聖女よ!!」
やはり聖女だった。
そして今用具入れの中で震えているミリという少女もまた聖女候補というわけか。
私に堂々と宣戦布告とは面白い。
魔王の血が騒ぐ。
「ほぉ、では本物の聖女様は敵を用具入れに閉じ込めて悦に浸っていたわけか？」
私は挑発するように前に出る。
「な、なによ！この無礼者！私は本物、聖女として選ばれた存在！貴方のような偽りの聖女が楯突こうなどと！……」
女は顔を真っ赤にして叫んでいる。
随分と小物臭い。
キャンキャン喚いて、それで自分を強く見せているつもりか？

こいつは本物の聖女じゃなさそうだな……
私はノールに向かって手を掲げる。
「……？何ですの」
触れてもいないのにズリズリと彼女が後ろに押されていく。
「ほら、聖女ならご自慢の魔法で何とかしてみせろ」
私は腕を前に突き出す。
ノールは顔を真っ赤にして踏ん張っているがじりじりと下がっていく。
その程度の魔力で魔王に敵うとでも。
私はそれを鼻で笑うと、腕を振るった。
「それじゃあ先輩、さ・よ・な・ら！」
「ちょっ！あっっ！いやあああぁぁぁ!!」
ノールは吹っ飛ぶとそのまま花壇に突っ込んでいった。
そして動かなくなる。
気絶したようだ、叫び声まで小物臭かったな。
私はその光景を冷めた目で見ていた。
「ヨル、何したの？あの人大丈夫」
ルーカスが恐る恐る聞いてくる。

別にたいしたことはしていない。
魔力で押し出しただけ、術式でもない、ただの子供騙しだ。
まぁ、いつかの狼のように千切れなかったのは彼女がその魔力で抵抗したからだ。
だてに聖女を名乗っているわけではなさそうだ。
私はため息をつく。
ノールとかいう女、これに懲りて大人しくなればいいけど……
ミリと名乗ったもう1人の聖女に敵対心がないだけマシか。
あぁ、そうだ彼女の方が本物っぽいので仲良くしておいた方が得策だろう。
私は用具入れの扉を開けた。
でも、そこに彼女の姿はなかった。
どうやらどさくさに紛れて逃げ出したらしい。
むぅ……こっちはこっちで聖女らしくないな。
「疲れた、帰って寝る」
「あ、うん……そうだね」
私が歩き出すとルーカスがしょんぼりして付いてきた。
お前はお前で、なんで落ち込んでるんだ？
私は釈然とせず帰路についた。

私は気づかなかった。
用具入れの影からこっそりこちらを見る視線に。
彼女の呟く言葉に。
「ま、魔王？嘘でしょ……」

◊◊◊◊

聖女候補者報告書
聖女の発見の報告が３件重複している。
聖女が３人確認されたことは過去になく、事態は混迷を極めている。
国王様は早急に誰が本物の聖女か特定しろとの王命を出した。
現時点で判明している候補者３人の情報を簡素ながらここに記す。
ヨル・リデル
最初に発見された聖女候補者。
剣を操るその魔法から剣の聖女という異名を持つ。

常人離れした魔力量を持ち、その高い戦闘技術で魔族を退けた。
騎士団副団長ロレンス・リラ・ハモンにより聖女と断定。
ノール・メル・ウィンディ
王都の貴族メル家の長女。
魔力量は常人離れしているものの聖女特有の魔法がなかったため、最近まで聖女とは判別できていなかった。
今年になって、歴代でも聖女のみが使えた回復魔法の才能が開花し、聖女と判断される。
王都学院学院長ホラ・メル・ロストにより聖女と断定。
ミリ・ラズ・ルーナ
王都の貴族ラズ家の三女。
魔力量は常人離れしているが魔法の成績は振るわず。
彼女特有の魔法のため聖女だと気づかれていなかった。
特有の魔法は人の心を読むもので、彼女の知るはずのない貴族の内情を話したことでその魔法が露見した。
教会教皇パロナ・ルイ・トリコスにより聖女と断定。

魔法と術式

「魔王様、黒炎の使い心地はいかがでしょうか？」
そう話しかけてきたのは、魔王軍の幹部の1人であるラナだ。
「悪くない……が、消費魔力が多すぎる」
私は黒煙の術式を展開しながら、そう愚痴る。
私の攻撃術式のほとんどは、この魔族の女が開発したものだった。
魔王軍幹部にして、術式開発の第一人者。
それが、このラナという女だった。
「それは仕方がないですね、コストを度外視した最強の術式、それが黒炎ですから」
ふむ、まあ術式の詳しいことは知らないが…それなら仕方がないか……
納得した様子の私を見て、ラナは不満そうに口を尖らせた。
「ちょっと！魔王様、それで納得しちゃうんですか？」
……なんだ？　納得して何が悪い。
コストを度外視した術式なら消費魔力も多くなるだろう。
何もおかしなところなどないと思うが。

「術式のどの効果が魔力を要求しているのかわかってます？どの回路が魔力を節約しているかも！本当に無駄のない術式だと理解して納得しているのですか!?」
「いや……それは術式を開発する貴様らが理解していればいいだろう」
ラナは私を聞き分けのない子供を見るような目で見てくる。
「はー！ダメダメ！だめですよ魔王様もっと好奇心を持たなきゃ。いいですか、知識こそ最大の力なのです。情報、情報ですよ！」
ラナはまるで教師のように語る。
こいつはいつもこうやって上から物を言ってくる。
魔王である私の方が、地位は上なのだが……
だが、こいつの作る術式は確かに素晴らしいものだ。
だから、このくらいの無礼は許している。
「魔王様！ツノもぐらの生息分布はわかりますか？」
「……はぁ？」
突然の質問に、思わず呆けた声を出してしまう。
ツノもぐらとは、地中に住むもぐらのような魔物で、大きなツノを持つのが特徴だ。
だが、その生息分布がどうしたというのだ。
「ダメダメダメ！ちゃんと考えてくださいよ魔王様。正解はバナ高原の南西ですよ」

「それがいったい、なんだというのだ」
私若干イラつきながらが聞くと、ラナは得意げに笑った。
「かの5代目魔王は城に攻め込まれた際、応戦しつつ無事逃げ延びました。ツノもぐらの掘った穴を利用して逃げたのです。人間どもはツノもぐらの生息分布を知りませんでした。だから地中に道があるなど気づきもしなかったのです。これが知識の重要さです。情報を制する者が世界を制します」
ラナの言葉に、私は少し考える。
確かに彼女の言うとおりかもしれない。
「では、黒炎はなぜ燃費が悪い、術式の詳細を教えてくれ」
私がそういうと、ラナは嬉しそうな顔をした。
そうして嬉々として術式の概要を語りだす。
こうして私とラナは幾度も議論を重ねた。
無駄な知識などない……そう教えてくれたのは彼女だった。

◇◇◇◇

魔術学科の授業は学科と実技の二つに分かれる。
学科は人間が魔力を使いこなそうと涙ぐましい努力をして魔法をあみ出した歴史を学ぶことができる。
こちらは勉強していてなかなか面白い。
滑稽でな。
実技では実際に魔法を使い、実戦的な訓練をするようだ。
今日は魔法学科初の実技の授業だった。
演習場に集められた生徒たちは皆魔法に自信があるのか明るく、楽しげだ。
演習場には角のついたカカシがいくつも並んでいる。
魔族のつもりだろうか。
「本日はまず君たちの実力を測らせてもらいます。基本属性の魔法を使えるかどうか、それを見せてもらいましょう」
教師の男、確か名前はダンデだったか。
彼はそう宣言すると私に目を向けた。
「ヨル・リデル君、君は聖女として魔族との戦闘経験もあります。前に出て皆に手本を見せてくれませんか？」

ふむ、私か？
別に構わないが……私は手本には向かない気がするのだが。
私は一歩前に出ると右手をかざした。
いつものように、手から魔力を放出する。
カカシは魔法耐性を強めてあるのか、若干抵抗を感じる。
グシャッ
だが、ものの数秒でそれは木っ端微塵になった。
おおー、と周囲から歓声が上がる。
「すばらしい威力です。でもそれは純粋な魔力による攻撃ですね？属性を変えて見せてください」
属性を変える？
「ふむ……出来ないが……？」
それはあれだろ、人間の使う低級な魔法とかいう技術だろ。
魔力を体内で変換し火や氷として射出する。
魔力を知覚できない人間が魔力をどうにかして利用しようとしてできた妥協の産物。
術式を知る私からしてみればあまりの稚拙さに失笑を禁じ得ない。
そもそも魔力効率が悪すぎる。

体内で魔力を変換する際に魔力の大部分が失われてしまっている。
なぜ私がそんな術式の劣化品を使わねばならないのだ??
「できない？君は剣の魔法や防御の魔法を使うと聞きましたが……」
「ああ、これか？」
教師の言葉に、私は剣の術式を起動して答える。
教師は私の剣を見つめると、首を振った。
「これは、あなた独自の魔法ですね。他の方の参考にはならないでしょう。もういいです」
そう言うと教師は他の生徒の名を呼び、私を下がらせた。
むか！なんか私が役不足みたいな流れになったじゃないか。
私は若干のイラつきを感じながら、他の生徒たちが訓練を始めるのを眺める。
皆、思い思いの属性の魔法を放っている。
体内で魔力を変換するため、発動までに時間がかかっているし、威力も大したことないな。
生徒たちをしらけた目で見ていると教師が近寄ってきた。
「あなたはこっちですよ、ヨル君」
む、なんだ？

なるほど、私の術式はあいつらと格が違うことだし、ひとつ上の授業を受けさせてもらえるのかな？

「まさか、聖女と呼ばれる君が魔力を変換できないとは思いませんでした。ですが焦ることはありません、ゆっくり皆に追いついていきましょう」

そう言って教師が取り出したのは明らかに子供向けの教科書で……

……あ〝あ〝ん???

なんだその初歩の初歩みたいな教科書は！私を馬鹿にしているのか！

「聖女は魔法に精通するものが多い。ですがあなたは独自の魔法に頼り切って魔力変換を学んでこなかったのですね」

こいつ！この優しげな顔、私を哀れんでいるつもりか!?

学んでこなかったのではない、必要ないと判断しただけだ！

魔法などという人間の技術など出来なくとも何の不便も感じないわ！

「安心してください。これから一年かけて基礎を学びましょう。」

だから、その劣等生を見るような眼差しを今すぐやめろ。

この……こいつ……馬鹿にしおってぇぇぇ……私は魔王だぞ。

魔法ぐらいできる！できる……はず……今まで使おうと思っていなかっただけだし……

結局、その授業中では魔力を体内で変換するという感覚を掴めずに終わった。
ぐぬぬ……　お・の・れ・ええええ……

放課後、私はミリを探していた。
私の他の2人の聖女、そのうちの1人ノール先輩はとても聖女と言える性格ではなかった。
なので、私は消去法でミリを聖女だと判断した。
彼女といち早く打ち解け、聖女の座を返還したいところなどだが……
私、避けられてない？
そう、なぜか私は彼女から距離を置かれていた。
私が話しかけようとすると何故か逃げられるし、顔を合わせようともしてくれない。
私はいまだにミリとまともに会話すらできていなかった。
なんでぇ……？
私は何か彼女に嫌われるようなことしただろうか？
いや、ノール先輩に閉じ込められているところを助けたし、感謝されるようなことはあっても嫌われるはずはないと思うのだが。

今日も授業が終わるといつの間にか姿を消してしまった。
うぅむ、どうしたものか。
彼女を探して学院内を徘徊しているのだが一向に姿が見えない。
また、今日も進展なしか……
ため息をつく。
その時、私の鼻が異臭を捉えた。
魔族の匂い……？
三度目となればもう慣れたもので、私はその匂いを魔族のものと認識した。
学院に魔族が？
なぜ、とは思わない。
ここには次代の聖女、勇者が在籍している。
勇者のガキはまだまだ未熟だし、私以外の聖女も戦いには慣れていないだろう。
攻め込むのは絶好の機会かもしれない。
匂いを辿り、魔族を探す。
ふむ……？匂いが薄いな。
随分たよりない匂いだ、弱っているのか？それとも匂いを隠している？
匂いは食堂まで続いていた。

食堂の扉を開ける。
放課後、静まりかえったそこには誰もいない。
だが、奥の方から微かに音がする。
咀嚼音、食事中か？　気配を殺し、音のする方へと足を進める。
果たして、厨房にそいつはいた。
小さな体躯に黒い羽、蝙蝠のような見た目だが、その頭部には立派な角が生えている。
「魔族の匂いがすると思ったのだが、なんだ使い魔か」
突然現れた私に驚いたのか、使い魔は食事をしていた手を止めこちらを振り返る。
「ゲッ！人間」
そう言うと慌てて口の中のものを飲み込み、逃げ出そうとしたが、私はそれよりも早く間合いを詰める。
ムンズと首根っこを掴み持ち上げる。
そいつはジタバタと暴れたが、首をキュッと締めてやれば観念して大人しくなった。
掴んだ手に感じる痩せ細った身体。
ふさふさの毛に覆われているので見ただけではわからなかったが、だいぶ衰弱しているな。
大方この学院に潜入調査に来たが、食べ物にありつけず飢えて厨房を漁っていたとい

うところか？
使い魔とは魔族の使役する下僕のようなものだ。
弱い代わりに数を多く用意できる。
使い魔を通して魔族は人間の基地を偵察したり、情報を集めたりするのだ。
「さて、お前は誰の使いだ？」
使い魔の首を締めながらガクガクとゆする。
「んげえええぇぇぇっっ！助けてくれぇ！」
「質問に答えろ」
「ぎゃああっ！言えない！本当に言えない！許してくれぇ」
「……何か勘違いしているようだな、私はお前の敵じゃない」
私は腕を離すと使い魔を解放してやった。
ゲホゴホッと咳き込んでいたが、やがて落ち着きを取り戻すと、警戒心あらわに私を睨みつける。
私は指を一本使い魔に見えるように立てると術式を起動した。
なんの効果のない、形だけの術式。
だが使い魔のこいつには見えるはずだ、私の術式が描く魔族のシンボルが。
「魔族のサイン!?だいぶ旧式のものだけど……なんだお前？仲間かよぉ!?」

それを見た使い魔はキィキィ喚きながら飛び回り始めた。
いちいちうるさい奴だな。
「まぁ、そういうことだ。サインを見てわかるだろうが私は長い間魔族との接触を絶っていてな、今の魔族の状況がわからない」
「え～～！お前そんなに長い間潜入調査してるのか？すごいなぁ～」
使い魔は何やら尊敬の眼差しで私を見つめてくる。
まさか、私を使い魔の先輩だとでも思っているのか？
やめろ、私をそんな下級の存在と一緒にするな。
言動にイラっとしたが、頭を鷲掴むのは控えておく、うまくいけばこいつから魔族の現状を聞き出せるかもしれない。
「お前の雇い主は？何をしにここに来た」
「俺様の雇い主は魔王様だぞ～、魔王様は勇者と聖女を探れと御命令だ」
……なに？
魔王？　……だと……
一瞬、言葉の意味が理解できなかった。
だって魔王は私で……
ああ、そうか……魔王も次代に移っていたのか。

私はその事実にようやく気がついた。
もう、魔族の頂点は、私ではなくなっていたのだ。
つまり、なんだ……私は魔王でも、聖女でもなく、ただいたずらに力だけ持ったただの人間ということか？
アイデンティティーの喪失に目眩がするな。
「魔王は……魔族領を、捕虜を取り戻す気なのか？」
私の言葉に使い魔はキョトンとした顔をしていたが、すぐにケラケラ笑い出した。
何がおかしいのか、ゲラゲラと笑う使い魔に苛立ちを覚えながらも、次の言葉を待った。
しばらくして落ち着いたらしい使い魔は、顔を上げてニヤリと笑った。
「魔王様はそんなみみっちいこと考えてないぞ。魔王様の望みはただ一つ、この世から人間を消し去ることだけ!!そしてあの方にはそれを成すだけの力がある」
かつての勢力を取り戻すならまだわかる。
だが、この世から人間を抹消するだと？
いくらなんでも話がぶっ飛びすぎている。
そんな戦力が今の魔族にあるとは思えない。
……だが、この使い魔はその言葉を信じているように見える。

それだけの実力があるのかどうかはさておき、現魔王はことを起こすつもりのようだ。
「そいつは……すごいな。一体どうやってそれを成すつもりだ？」
今はなにより情報が必要だった。
私は今の魔族のことを知らなすぎた。
人間にせよ、魔族にせよ、守るためには双方の現状を正しく理解する必要がある。
「……さぁ」
使い魔の回答に私はため息をつく。
期待した私が馬鹿だった。
所詮使い魔は使い魔、確信に迫る情報を持っているはずないか。
私の知らないところで状況は動いている。
今後は魔族の内状も探る必要がありそうだ。
「おいお前、名前はなんという？」
「ん？俺様の名前か？俺はバズって言うんだ」
「そうか、よしバズ貴様は食い物に困っていそうだから、私のもとに来れば飯を食わせてやる。その代わりお前の持っている情報をよこせ」
「本当か!?助かる～」

使い魔は目を輝かせる。
単純な奴だな、こんな奴が諜報員とは……大丈夫なのか？
少し魔族の内状が心配になった……

◇◇◇◇

静寂な空気の流れる大聖堂。
その厳かな空間で、複数の男たちが顔を付き合わせていた。
「聖女候補者の動向はどうなっている？」
白髪と豊かな白髭を蓄えた老人が重々しく口を開いた。
教会教皇パロナ・ルイ・トリコス、王国の教会を統べる人物だ。
相対するのは３人の男。
いずれも教会の高い地位にいる者達、そして聖女ミリ・ラズ・ルーナの信奉者だった。
「癒しの聖女は相も変わらず聖女の地位でわがまま放題です。あれでミリ様と同じ聖女候補とは……嘆かわしい」

そのうちの1人が忌々しげに吐き捨てる。
他の者も同意見なのか、一様に渋い表情をしていた。
「癒しの聖女は早めに始末した方がよいのかもしれないな……」
教皇がポツリと呟く。
剣呑な言葉、だが3人のうち2人はその言葉にうなずいた。
「お待ちください、教皇様の耳に入れておきたいことがございます。剣の聖女の件なのですが……」
頷かなかった1人は、教皇の発言に異を唱え懐に手を入れると水晶玉を取り出した。
それは映像を記録する魔道具だった。
男が魔力を流すと、水晶の中に情景が浮かぶ。
教皇たちは興味深げにそれを覗き込む。
映し出されたのは、件の剣の聖女だ。
「彼女を付けていた私の部下が目撃した映像です。ご覧ください、彼女が話している相手を」
件の剣の聖女が話していたのは、魔族の使い魔だった。
聖女が敵対しているはずの魔族と会話をしている。
その事実だけで、男たちは戦慄に包まれる。

尋問しているのならまだわかる、だがあろうことか剣の聖女はその使い魔を見逃し、その場を去った。

その様子が魔道具にはしっかりと記憶されていた。

「これだけではありません。剣の聖女は体内で魔力を変換できなかったことが報告されています」

「つまり……どういうことかね？」

教皇の問いかけに男は答える。

「彼女は人間に扮した魔族の可能性が非常に高いのです。魔力の変換を行わず未知の術を行使する、記録にある魔族のものと一致します」

その一言に、全員が押し黙ってしまう。

剣の聖女が魔族、荒唐無稽な話のようで、妙な説得力がある。

最近で魔族が目撃されたのは今回の件も含めると3回。

そのどれにも彼女は関わっていた。

おまけに、夜会を襲われた事件では大量の魔族の捕虜が逃げ出している。

先代の勇者も対応したという話なので、一概には彼女のせいとは言えないが……

彼女は魔族を見逃してしまった前科がある。

歴代聖女のどれとも似ないその好戦的すぎる性格、そしてその武力。

もし彼女が魔族だとするのなら、納得のいく話だ。
「剣の聖女は真の聖女たるミリ様を害する危険な存在です。早急な対処を」
その言葉に教皇は深くうなずいた……